石川県埋蔵文化財情報

第 31 号

巻頭図版（古府タブノキダ遺跡、北吉田ノシロタ遺跡、金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）、同（東兼六町５番地区））

平成25年度上半期の発掘調査から …… 調査部長　藤田邦雄…（１）

発掘調査略報

古府タブノキダ遺跡（七尾市） …… （２）
徳田宮前遺跡（志賀町） …… （４）
北吉田ノシロタ遺跡（志賀町） …… （６）
金沢城下町遺跡（丸の内７番地点） …… （８）
金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区） …… （10）
長池ニシタンボ遺跡（野々市市） …… （12）
米永ナデソオ遺跡（白山市） …… （13）
高見遺跡（白山市） …… （14）

平成25年度上半期の遺物整理作業 …… （16）

平成25年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録 …… （19）

はじめに …… 所長　福島正実…（19）
北部九州の船と交流　～伊都国を中心に～ …… 江野道和…（20）
山陰地方の舟と水上交通　～青谷上寺地遺跡出土資料を中心として～ …… 君嶋俊行…（24）
福井県三方五湖周辺における舟と水上交通　－縄文時代～平安時代の出土資料から－
…… 小島秀彰…（27）
石川県内の船関係資料 …… 金山哲哉…（30）
富山県の出土船について …… 廣瀬直樹…（33）
新潟県における舟と水上交通 …… 岩野邦康…（36）
秋田県における舟 …… 伊藤直子…（40）
北海道における事例 …… 鈴木　信…（43）
討論と見学会 …… 北川晴夫…（46）

調査研究

前田氏（長種系）屋敷跡より出土した貝類遺存体の研究 …… 畑山智史・安中哲徳…（49）
七尾市　古府ヒノバンデニバン遺跡出土墨書資料概報 …… 和田龍介…（57）

2014 年4月

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

古府タブノキダ遺跡　遠景（南から）

古府タブノキダ遺跡は、石動山系の山麓裾にある南ヶ丘台地上に展開する集落遺跡である。台地の北西平野部には能登国分寺跡が所在する（写真左上）。今回の調査は遺跡南端の台地縁辺部を対象とし、３×４間の大型掘立柱建物ほかを検出した。過去に北側近接地で調査が行われており、その際確認された官衙的性格を持つ建物群が台地端まで及ぶことを追認した。

北吉田ノシロタ遺跡　調査区全景

北吉田ノシロタ遺跡は志賀町北吉田地内を流下する米町川流域に展開し、今回の調査区では掘立柱建物（布掘建物を含む）群を中心とする遺構を確認した。柱穴に礎板を置くものが多く、建物規模は１×２～３間のものが中心である。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期を主体とするものであった。

古府タブノキダ遺跡　遠景（南から）

北吉田ノシロタ遺跡　調査区全景

写真解説

金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）　第２面遺構完掘状況全景（北から）

金沢城跡の北東側を区画する白鳥堀に面した近世城下町の遺跡である。調査区は、金沢地方・家庭・簡易裁判所の敷地内に位置しており、江戸時代の城下町絵図には加賀藩士の岡嶋備中・奥村源左衛門などの屋敷が描かれている。

今回の調査は平成21年～平成23年度調査区の北側、年代の異なる４つの遺構面（第１面～第４面）、累計2,130㎡を対象に行った。

調査の結果、遺構では石組みや素掘りの井戸・溝、礎石建物、区画溝、道路状遺構、池状遺構などの遺構を確認した。土師器や須恵器、陶磁器類、金属製品や木製品、漆製品など多様な遺物が出土した。

金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区）　廃絶後の墓地区画状況（北区上段　西から）

金沢市東兼六町地内に所在し、鶴林寺の旧墓地跡である。

墓地廃絶後の墓基礎等の検出状況。戸室石も用いられており、明治期以降の区画か。手前に見えている越前焼甕は下層の江戸時代に属するもので、型式的には18世紀中葉頃に位置づけられる。

金沢城下町遺跡（丸の内７番地点） 第２面遺構完掘状況全景（北から）

金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区） 廃絶後の墓地区画状況（北区上段 西から）

平成 25 年度上半期の発掘調査から

調査部長　　藤田　邦雄

平成 25 年度は、石川県教育委員会から 19 件の発掘調査を受託した。ただし、古府・国分遺跡と七尾城跡については調査箇所及び調査期間等の関係から 2 回に分けて調査を実施した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省が 6 件、鉄道・運輸機構 3 件、最高裁判所 1 件、県土木部 8 件、県教育委員会事務局 1 件であった。本号では平成 25 年 4 月から 9 月にかけて当法人が実施した 8 遺跡の発掘調査の概要を紹介する。

古府タブノキダ遺跡（七尾市）では、古墳時代後期の竪穴建物 4 棟、奈良時代の掘立柱建物 1 棟などを確認した。昭和 57 年には隣接する旧七尾工業高校敷地内での発掘調査で多数の掘立柱建物がみつかっており関連性が注目される。

高見遺跡（白山市）は、北陸新幹線の敦賀延伸に伴う調査で上下 2 つの遺構面を確認した。上層は室町時代の集落で方形の堀に囲まれた屋敷地、下層は弥生時代後期後半の竪穴建物 1 棟などを検出した。

金沢城下町遺跡（丸の内 7 番地点）（金沢市）では、中世後半から近世後半以降に伴う 4 つの遺構面を確認した。特に第 3 面は広い範囲で焼土に覆われており、17 世紀代の大火による廃絶を窺わせている。

北吉田ノシロタ遺跡（志賀町）では、弥生時代後期から古墳時代の掘立柱建物、土坑などを確認した。米町川に沿った立地で礎板をもつ大型掘立柱建物、枕木を敷いた布掘建物などが注目される。

金沢城下町遺跡（東兼六町 5 番地区）（金沢市）は、曹洞宗寺院の墓地跡で、火葬墓及び土坑墓を約 60 基確認した。遺構面は墓地廃絶時の第 1 面とその下層にあたる第 2 面を検出した。埋葬形態は越前焼大甕、木棺、早桶等で 20 体前後の人骨がみつかっている。

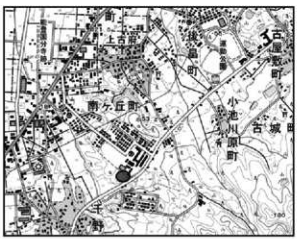
平成25年度発掘調査遺跡

No.	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	主な時代	関係機関	関係事業
1		中カワナミマエダ遺跡	輪島市三井町中	400	縄文、弥生、古代	国土交通省	一般国道470号能越自動車道輪島道路
2		古府ヒノバンデニバン遺跡	七尾市古府町	3,900	古代		一般国道159号（七尾バイパス）
3		古府・国分遺跡	七尾市国分町	2,730	古代、中世、近世		
4	○	古府タブノキダ遺跡	七尾市千野町	1,000	古墳、古代		一般国道470号能越自動車道七尾永見道路
5		七尾城跡	七尾市古屋敷町、小池川原町	2,115	中世、近世		
6		一針C遺跡	小松市一針町	1,800	上層・中世 下層・弥生、古墳		様川改修
7	○	高見遺跡	白山市北安田町	1,450	上層・中世 下層・弥生	鉄道・運輸機構	北陸新幹線
8	○	米永ナデソオ遺跡	白山市米永町	800	古代		
9		宮保B遺跡	白山市宮保町	1,700	中世		
10	○	金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)	金沢市丸の内7番	2,130	近世	最高裁判所	名古屋高裁金沢支部・金沢地家所裁庁舎新営
11	○	徳田宮前遺跡	志賀町矢田	380	弥生、古墳	県土木部	主要地方道田鶴浜堀松線
12		徳光聖興寺遺跡、徳光ヨノキヤマ遺跡	白山市徳光町	1,000	弥生、中世		主要地方道金沢美川小松線
13		加茂キツネ塚遺跡	加賀市加茂町	1,750	弥生		一般県道片山津山代線
14		加茂新高遺跡	加賀市加茂町	1,140	中世		
15	○	北吉田ノシロタ遺跡	志賀町北吉田	1,000	弥生、古墳		二級河川米町川改修
16	○	長池ニシタンボ遺跡	野々市市長池ほか	430	弥生、近世		二級河川安原川改修
17	○	金沢城下町遺跡(東兼六町5番地区)	金沢市東兼六町	1,730	近世		急傾斜地崩壊対策
18		南新保E遺跡	金沢市鞍月東2丁目	1,200	中世		県立中央病院
19		小立野ユミノマチ遺跡	金沢市小立野5丁目	1,910	近世	県教育委員会	金沢商業高等学校
計		19件		28,565			

古府タブノキダ遺跡

所 在 地　七尾市千野町地内　　調査期間　平成 25 年 6 月 6 日～同年 8 月 26 日

調査面積　1,000㎡　　調査担当　石田和彦　澤辺利明　木原伊織　清水晃大郎



遺跡位置図（S=1/25,000）

調査区遠景（西から）

調査区位置図

調査成果の要点

- 広範囲に広がる遺跡の南西縁辺部において、古墳時代から奈良時代にかけての集落遺構を確認した。
- 古墳時代後期の竪穴建物４棟を検出し、土師器、須恵器などの遺物が出土した。
- 奈良時代のものと考えられる、大型の柱穴をもつ掘立柱建物を１棟検出した。

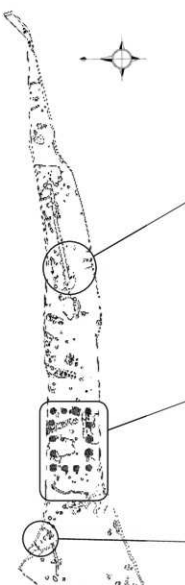
能登国分寺跡から約 500 m南東の南ヶ丘台地には、古墳時代後期から奈良時代にかけて営まれた古府タブノキダ遺跡が所在する。古府町・南ヶ丘町・千野町にまたがる広範囲な遺跡ではあるが、南ヶ丘団地造成ほか相次ぐ開発行為のため削平され消失した箇所も多い。本年度の調査は、国土交通省による一般国道 470 号能越自動車道建設（七尾氷見道路）を原因とし、古府タブノキダ遺跡の範囲の中では南西端の地区を対象とした。

調査区は、東から西へと緩やかに傾斜しているが、ほぼ中央の最も平坦な地区から炉を持つ竪穴建物を南北に並列するようにして２棟検出した。近年までの土地利用により、地表面の掘削が激しく、遺構の残存状況は良くない。この２棟の建物から一度傾斜が強くなったあと、ふたたび緩やかになる地点で一辺 4m 程度の竪穴建物を、さらに調査区西端の急傾斜となる手前に一辺３m程度の竪穴建物をそれぞれ１棟検出している。中央付近で検出した竪穴建物からは７世紀中ごろのものと推定される須恵器・土師器が出土しており、他の建物も同様の時期のものと推察する。

前出の一辺 4m 程度の竪穴建物の西端を削平する形で、柱穴が４×３間で並ぶ掘立柱建物を検出した。柱穴は一辺約１

mの方形で深さ１m前後と大型のものである。棟方向はほぼ東西をさす。また、この掘立柱建物の西３m地点には、この西側の急斜面を区画するかのように、長さ約 6m の溝が走る。

古府タブノキダ遺跡については、今年度の調査地に近接する旧七尾工業高校第２体育館建設の際に発掘調査が行われている（昭和 57 年）。その際には、掘立柱建物が多数確認され、その規模や規格的配置から官衙的な性格を持つ遺跡とされていた。今回の発掘調査で検出した掘立柱建物も同期間におさまることから、それらの特別な建物域が丘陵端まで及んでいたことが確認された。また、竪穴建物は新知見であり、遺跡開始期の様相を検討する上で貴重な資料となる。　　（石田和彦）



調査区全体図（1/600）

竪穴建物（SI01）（東から）

掘立柱建物（SB01）・竪穴建物（SI04）（上空から）

竪穴建物（SB03）（南から）

徳田宮前遺跡

（とくだ みやのまえ）

所在地　羽咋郡志賀町矢田地内

調査面積　380㎡

調査期間　平成25年4月23～同年5月31日

調査担当　立原秀明　木原伊織

遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

・弥生時代の集落跡を確認した。
・西側調査区（A区）では、掘立柱建物の柱穴と考えられる小穴を確認した。
・B区では東端の溝（SD6）から弥生時代の土器が多量に出土した。
・両調査区とも地形の変換点付近に南北方向の溝が掘られていた。
・遺跡周辺には古墳群があり、それらを営んでいた勢力の生産基盤になっていたと考えられる。

徳田宮前遺跡は、羽咋郡志賀町の北東、徳田盆地から矢田地区に向かって北にのびる谷の入り口に位置する。今回、いしかわ広域交流幹線軸道路整備事業において、徳田大津インターチェンジで、のと里山海道と交差する県道3号線の拡幅工事を起因として発掘調査を実施し、弥生時代の集落跡を確認した。

調査区は県道に沿った細長いもので、町道により東西に二分される。西側調査区（A区）は丘陵裾部に、また東側調査区（B区）は谷底の低地にあたる。ともに低く窪んだ部分と少し高い部分が見られ、前者（A区）には掘立柱建物の柱穴と推定される小穴が分布している。しかし、調査範囲が限られているため建物の構成は不明である。また、両調査区で土坑がみられるほか、東側調査区東端で幅2m以上の大きな溝（SD6）が検出され、まとまった量の弥生土器が出土している。

今回の調査で徳田盆地の低地で弥生時代に集落の形成がみられること、用水のような大きな溝が存在することがわかった。本遺跡東方約500mの丘陵には徳田古墳群が分布しており、特に1号墳（徳田燈明山古墳）は、能登最大規模を誇る前方後円墳で、全長83.5mもある。遺跡周辺は、古墳群を営んだ勢力の生産基盤になったと考えられ、今後周辺の調査が進むにつれ詳細が明らかになっていくと期待される。

（木原伊織）

調査区全景

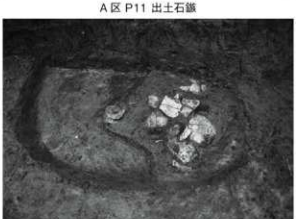
A 区 完掘状況（東から）

A 区 P13 出土遺物（北から）

A 区 掘立柱建物（東から）

A 区 P11 出土石鏃

B 区 完掘状況（西から）



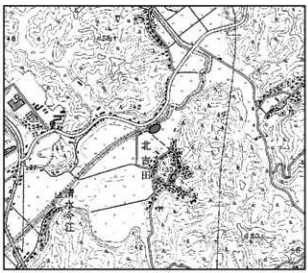
B 区 SK14 弥生土器（南から）

B 区 SD6 掘削作業（東から）

B 区 SD6 弥生土器（北から）

北吉田ノシロタ遺跡

所 在 地　羽咋郡志賀町北吉田地内　　調査期間　平成 25 年 8 月 1 日～同年 10 月 2 日
調査面積　1,000㎡　　調査担当　山　晶裕　白田義彦



遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 中山間地域を流れる米町川流域に展開する弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする集落遺跡。
- 主な遺構は掘立柱建物であり、1×2間、1×3間規模の建物を中心とする建物群で構成される。
- 主な遺物は弥生時代後期～古墳時代前期のものが多く、古墳時代後期のものも散見される。

本調査区は遺跡位置図にあるとおり、北吉田集落の北側、北東から南西方向に流下する米町川の左岸に位置し、南西方面は水田地帯となっている。周辺の地勢は標高 30 ～ 40m 程の低山、丘陵と沖積平野が広がっている。この沖積地は現在、主に水田として利用されているが、往時は旧福野潟の水面下にあった所が大半だったと推定されている。調査区の標高は約 3m であり、往時の立地を考えると旧福野潟入江近くにあったものであろう。

今回の調査で確認した遺構は、主に掘立柱建物（布掘建物を含む）、土坑、溝などであり、掘立柱建物が大半を占める。掘立柱建物は布掘を伴うものがあり、布掘建物は、現時点で 3 棟確認している。掘立柱建物の柱穴径は大まかに 1m、50cm、30cm のものに分けられ、径が 1m、50cm 前後のものに、礎板を置く傾向がある。建物規模は比較的小規模で、1×2間、1×3間規模のものが主体をなすようである。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期を中心とするもので、古墳時代後期のものも散見する。

（白田義彦）

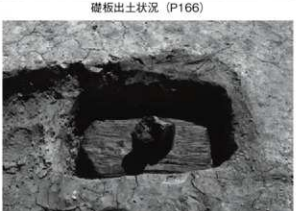
調査区中央部の布掘建物

調査区中央部の柱穴群

完掘状況（北東から）

礎板出土状況（P166）

礎板出土状況（P168）

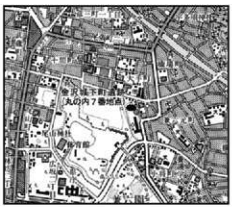


木柱と礎板出土状況（P165）

木柱出土状況（P186）

金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）

所 在 地　金沢市丸の内地内
調査面積　2,130㎡
調査期間　平成 25 年６月 12 日～同年９月 30 日
調査担当　浜崎悟司　山　晶裕　立原秀明　矢部史朗



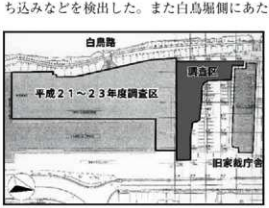
遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 金沢城跡白鳥堀東側に隣接する近世城下町遺跡であり、武家屋敷内を調査した。
- 時代の異なる４つの面の調査を行い、池状遺構や石組水路、道路状遺構、区画溝、石組みや素掘りの井戸、土坑、礎石建物等の遺構を検出した。
- 中世後半～近世の土師器や陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、銅銭、木製品、漆製品等の遺物が出土した。

金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）は金沢城跡白鳥堀東側に隣接する近世城下町遺跡である。調査地点は平成 21 年～平成 23 年の発掘調査を経て完成した金沢地方裁判所新庁舎の北側に位置する。絵図「寛文７年金沢図」（1667）によると当地には加賀藩士の岡島備中や奥村源左衛門の武家屋敷が置かれたとされており、明治以降に金沢監獄署、裁判所へと変遷した。調査は年代の異なる４つの遺構面（第１面～第４面）、累計 2,130㎡を対象に行った。

遺構は 19 世紀後半以降の第１面では石組みや素掘りの井戸、土坑などを検出し、19 世紀以前の第２面では石組みや素掘りの溝、井戸、土坑、道路状遺構などをそれぞれ検出した。第２面調査区東端部で確認された道路状遺構は石組みの側溝を備えており、石面の調整など他の石組溝よりも丁寧な造作が見受けられる。絵図にある武家屋敷の表通りに近い位置・方位を持ちその関係が注目される。第３面の 17 世紀前半頃の面では石組みや素掘りの井戸、大型の廃棄用土坑、道路状遺構、礎石建物、区画溝などを検出した。道路状遺構は幅員 3m、両側に石組みの側溝を備えており断面から少なくとも２面の路面を有し、改修して使用されていた様子が窺える。同調査区東側では広範囲で火災によるとみられる焼土層が面の上下で確認されており、炭化した木製品や被熱した金属製品などの遺物が多く出土している。数回にわたる城下の大火（寛永８年（1631）・寛永 12 年（1635）など）の後に区画整備が行われたとも考えられる。第４面の中世後半～ 17 世紀前半の面では、第３面の下位 30 ～ 60cm で黒色土の硬化面を検出し、そこで複数の切り合いを持つ廃棄用土坑、石組みの溝、堀状の落ち込みなどを検出した。また白鳥堀側にあたる調査区西側からは過年度の調査で確認された屋敷の庭園の一部とみられる地山面での段状の掘り込みや池状遺構、石組水路などを検出した。これらは第２面から第４面相当の遺構と考えられ今後の確認が待たれる。

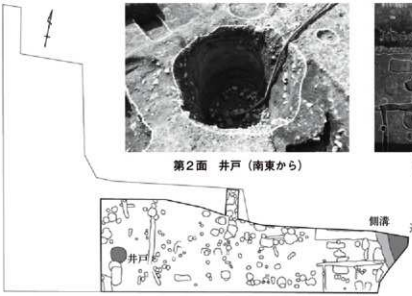


調査区位置図

遺物では中世後半～近世の土師器や陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品、漆製品等の遺物が出土した。今後、遺物整理、過年度の調査結果との参照を進める中で城下の町割の変遷がより明らかになるものと期待される。（矢部史朗）

第２面　井戸（南東から）

第２面　東端部（上空から）

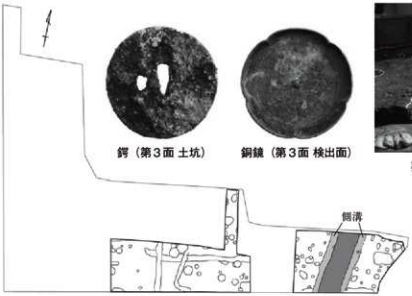


第２面遺構平面図（S=1/600）

鍔（第３面 土坑）

銅鏡（第３面 検出面）

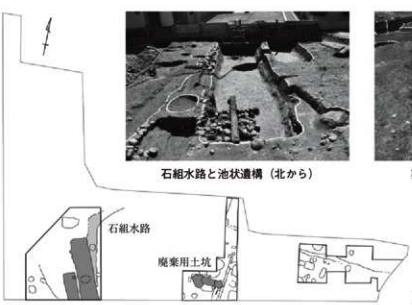
第３面　道路状遺構（北から）



第３面遺構平面図（S=1/600）

石組水路と池状遺構（北から）

第４面　廃棄用土坑（西から）



第４面遺構平面図（S=1/600）

金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区）

所 在 地　金沢市東兼六町地内
調査面積　1,730㎡
調査期間　平成 25 年４月 17 日～同年 10 月 22 日
調査担当　端　猛　和田龍介　荒川真希子　矢部史朗
　　中川京太郎　清水晃大郎

遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

・江戸時代の城下町遺跡（墳墓跡）である。
・廃絶時の状況及び江戸時代中期～後期と推定される整地面を確認した。
・江戸時代の埋葬形態は土葬が多く、甕棺、木棺、早桶が見られた。

金沢城下町遺跡は、近世金沢城下一円（外惣構内）をひとつの埋蔵文化財包蔵地として把握したもので、調査地毎に「○○地点（地区）」として名称が付与されている。本調査は金沢市東兼六町５番に位置する、鶴林寺の旧墓地跡を対象とした。墓地は寺の背後の崖地に営まれていたもので、崖地の保全を目的とする急傾斜地崩壊対策工事を契機として調査に至った。

鶴林寺は金沢城跡の南東（小立野・石引町周辺）に集積する寺院群である小立野寺院群の一角を占める曹洞宗寺院で、寺伝では江戸時代初期の慶長年間に白山市吉野谷から当地に移ったとされる。旧墓地跡は昭和 40 年代に移転した後は、現況では数家の墓を残して緑地化していた。

調査は崖地を縦断する３本のトレンチで基本土層や遺存状況を把握し、県文化財課と協議の上、墓地の景観・旧状を残す廃絶直後の面（第１面）と、その下層に位置する江戸時代と推定される整地面（第２面）の２面を対象とすることとした。第１面の調査は、鶴林寺に残された明治年間の墓地区画図を参考にしながら検出を進めた。墓道や墓区画の大まかな構造は区画図と差異は無かったが、墓の竿石のほとんどは移転時に搬出されており、墓基礎やカロート（納骨室）等が残るのみであった。蔵骨器は未整理であるがこの面に属するものもあり、墓標等の目印の無いものや流出して現位置をとどめないものが未移転のまま残ったものと考えられる。第２面は墓地を上段・中段・下段と分けた内中段の整地面で検出された。上段は整地土が流出し、ほぼ第１面と同レベルで検出されている。墓区画＋人一人が歩ける程度の墓道の範囲で造成された整地面からは、密集し、部分的には折り重なるようにして越前焼甕の蔵骨器・木棺等が約 40 基検出された。越前焼甕は口縁径・器高が 60 ～ 70cm の大型品が主で、凝灰岩を整形して蓋石としたものが数基認められたが、大半は木蓋と推定され内部に土壌が流れ込んだ状態で検出された。内部からは土葬骨・土人形・寛永通宝六道銭・煙管・紅皿等が出土している。木棺は腐食して坑跡が底面材のみのものが大半であったが、湧水地点等状態の良い箇所で数基の棺を確認することができた。また１基のみであるが早桶も検出され、内部からは漆器椀数個と箸が出土している。早桶の付近では打ち捨てられた状態で提灯や天蓋の材も出土しており、当時の葬送儀礼をうかがい知ることができる。第２面の詳細な時期は不明であるが、越前焼甕は 18 世紀中葉以降、近世土師器Ⅲは 19 世紀以降の年代観が与えられ、寺伝にあるような江戸時代前期まで遡るような遺構・

遺物は確認できていない。調査では発掘調査とあわせ、墓地から移転された竿石の碑面調査も鶴林寺のご好意により実施することができた。未整理ではあるが、江戸時代中期以降の紀年銘を持つものが多かった。

調査は次年度以降も実施の予定で、類例の少ない近世寺院墓地の調査例として多くの成果が上がることが期待できる。（和田龍介）

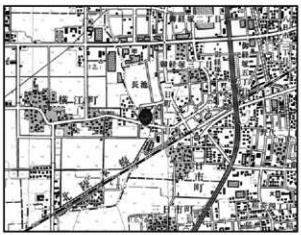
廃絶直後の墓地区画の状況

越前焼甕棺が並ぶ様子

重なり合って検出された木棺

長池ニシタンボ遺跡

所 在 地　野々市市長池地内
調査面積　430㎡
調査期間　平成 25 年 4 月 23 日～同年 5 月 17 日
調査担当　石田和彦　清水晃大郎



遺跡位置図（S=1/25,000）

調査区位置図

長池ニシタンボ遺跡は手取川扇状地扇央部に立地し、野々市市の北西部、JR 野々市駅から約 400 m西に所在する。今回の調査は、手取川水系の七ヶ用水のうちの郷用水である安原川の河川改修工事に伴うものである。すでに、今回の調査区より下流右岸において、本遺跡の続き部分に加え、長池カチジリ遺跡、横江古屋敷遺跡の調査が実施されており、弥生時代末期～古墳時代前期における安原川水域の遺跡分布の周密さが窺える。

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴建物 1 棟のほか、土坑、溝、小穴を検出した。竪穴建物は、平成 24 年度調査区に近接する北東部より検出した。北東部分は調査区外で、西隅は攪乱によって確認できなかったが、長辺の軸と平行の 2 基の主柱穴を検出し、短辺約 4 m の隅丸長方形を呈する。床面には、木材の痕跡が見て取れるような炭化物が散在していた。また、中央やや南よりに直径約 60cm の土坑を検出しており、貯蔵穴として使用していた可能性もある。なお、現安原川側の西半部分は近世以降に形成された旧河道で、遺構は検出されなかった。

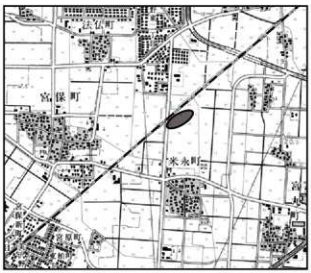
（石田和彦）

調査区遠景（南南東から）

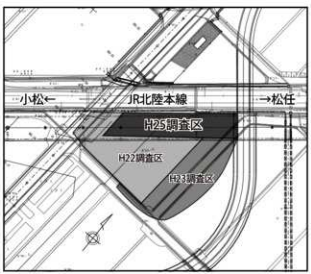
竪穴建物（SI01）（西から）

米永（よねなが）ナデソオ遺跡

所 在 地　白山市米永町地内
調査面積　800㎡
調査期間　平成25年4月22日～同年6月24日
調査担当　端　猛　荒川真希子



遺跡位置図（S=1/25,000）



米永ナデソオ遺跡調査区位置図（S=1/2,000）

米永ナデソオ遺跡は、霊峰白山を源流とする手取川によって形成された扇状地の扇央部端寄りに位置する。調査は北陸新幹線の金沢・敦賀間建設工事によるもので、平成22、23年には同じ北陸新幹線の白山総合車両基地（仮称）の建設工事に伴う発掘調査が隣接地で行われている。

過去の調査で、緩やかに蛇行しながら南北方向に流れる川の両岸に展開する平安時代後期のムラの様子が明らかとなっている。倉庫と考えられる建物や四面に庇を備える建物など総柱構造の掘立柱建物を7棟以上検出し、一部の建物で付随する井戸を確認している。

今回の調査では、前述の倉庫と考えられる掘立柱建物の柱穴の一部とその周囲を巡る塀と考えられる柱穴列の続きを調査し、その規模が明らかとなった。また、南北方向に流れる川の続きも確認し、その西側から新たな建物を検出した。ただし、川の東側では遺構は少なくなり、川からの出土遺物も南側では大量に出土するものの北側ではほとんど出土しないといった様に遺跡の立地する島状微高地の縁辺に当たると考えられる所見も得ている。

（端　猛）

調査区完掘状況（南西から）

調査の様子（北東から）

高見遺跡

所 在 地　白山市北安田町地内
調査面積　1,450㎡
調査期間　平成 25 年 6 月 24 日～同年 9 月 13 日
調査担当　岩瀬由美　中川京太郎

遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 上下二面の遺構面を確認した。
- 弥生時代後期～室町時代の複合遺跡を確認した。
- 下層では弥生時代後期後半の竪穴建物を 1 棟確認した。
- 上層では室町時代の柱穴群、竪穴状遺構、区画溝を確認した。

高見遺跡は JR 松任駅から南西に約 1.5㎞の JR 北陸本線南側に位置する。手取扇状地の扇端部に立地し、大きくは北西側の日本海に向けて緩やかに傾斜する地形であるが、細かい微高地と低地が複雑に入り組んだ地形となっており、その中を縫うように手取川七ヶ用水の山島用水系の大小の水路が流れている。平成 21・22 年度の調査では、上層で室町時代後半を中心とした遺構群が調査され、山島用水系の大川から引いたとみられる用水や、矩形の区画溝に囲まれた屋敷地などを確認し、下層で弥生時代終末期の竪穴建物、及び奈良時代の竪穴建物や掘立柱建物などを検出した。奈良時代の竪穴建物にはカマド跡や煙道が観察できた。

本年度は H22 年度調査区の北西部に当たる北陸本線沿いの調査を実施した。過年度と類似の遺構の検出が想定されていたが、下層の調査で検出された竪穴建物は弥生時代後期後半のもの 1 棟のみであった。半分以上が調査区外の線路側へ延びることから全形は不明であるが、径 6 m 以上の円形と推定される竪穴建物で、二重の壁溝が検出されたことから、建替えが想定された。他にも同時期の土坑などが検出されており、下層出土遺物の大半が当該期に帰属する。奈良時代に帰属するとみられる遺構も数基検出したものの、出土遺物が極めて少ないことから、集落の中心部からははずれていると推定された。上層では主に室町時代後半の遺構を確認した。H22 年度調査区西端部で部分的に検出されていた矩形の区画溝の続きを検出し、内部に掘立柱建物や竪穴状遺構を確認したが、遺構密度は薄かった。一方で、東接する別の区画内部では多くの竪穴状遺構や井戸と推定される土坑などを検出した。遺物は竪穴状遺構などから陶磁器や鉄滓が出土している。出土遺物の年代から、集落は 15 世紀末～ 16 世紀初頭頃に廃絶したと判断される。集落の廃絶後に田圃の畦畔が形成されており、以後現代に至るまで生産域として利用されていたことが確認された。　（岩瀬由美）

調査区位置図

上層遺構掘削作業

上層遺物出土状況

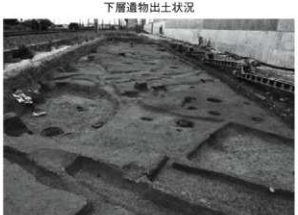
上層区画溝完掘状況

上層西半部完掘状況

上層東半部完掘状況

下層遺物出土状況

下層竪穴建物完掘状況



下層完掘状況

平成25年度上半期の遺物整理作業

国関係調査グループ

上半期は、大友A・大友E・直江西遺跡（金沢市　平成23年度調査）の木器実測から始まった。弥生土器、「稲依」と書かれた須恵器の蓋や人面墨書の土師器の甕（残念ながら一部分しかない）などの土器の実測、石器実測それらのトレースを行い、遺構図トレースで終了した。毎回ながら墨書を見つけたときや赤外線をかける時は、わくわくする。

次に金沢城跡（金沢市、橋爪門平成22～24年度・玉泉院丸24年度調査）に入った。陶磁器類、金属製品、大型石製品の分類、実測、トレースを行ったが、手こずったのは大型の石製品だ。多くの面を実測し拓本も採り面を変えるのに3～4人の手を借りなければならない物もあったからだ。

続いて宮保B遺跡（白山市、平成24年度調査）の土器、木器、石器の実測・トレース、遺構図トレース　二日市イシバチ遺跡（野々市市、平成24年度調査）の土器、石器の実測・トレース、遺構図トレース　指江ジュウサンザカ遺跡（かほく市、平成23年度調査）の土器実測・トレース、遺構図トレースと9月13日～30日の間に3遺跡と短期の整理作業が続いた。　（村上泰子）

墨書土器の実測（大友E遺跡）

大型石製品の実測（金沢城跡）

記名・分類・接合（指江ジュウサンザカ遺跡）

県関係調査グループ

上半期は金沢城跡（金沢市、平成24年度調査）、能瀬南B遺跡・加茂窯跡群（津幡町、平成23・24年度調査）、千野遺跡（七尾市、平成23・24年度調査）の整理作業を行った。

金沢城跡は、陶磁器、土師皿、瓦、石瓦等の石製品、木製品の記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。

瓦は、いぶし瓦が多く、軒丸瓦、軒平瓦、輪違い、丸瓦等、拓本が必要なものが多かったが、水の吸収が早い上、凹凸などから、紙が破けやすく、手間がかかった。木製品では箸、曲物底板や漆椀もあり、なかには出土時のまま泥の固まりに貼り付いた破片を丁寧に剥がし、バラバラの状態を組み合わせて実測した椀もあった。

次に能瀬南B遺跡・加茂窯跡群の整理作業を行った。土師器、陶磁器、石器の記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。この遺跡では大量の土師皿が印象深いものであった。

続いて千野遺跡の記名・分類・接合作業に入る。

細かい文様が施された弥生土器。実測する上では、文様、ハケ、ミガキなどの調整の図化は、やはり時間がかかるものであった。他に土師器、須恵器、管玉の未製品、石鏃などの石製品、金属器の実測をし、下半期へ作業は続く。（北野清美）

上半期の遺物洗浄は、平成24年度に調査した大友E遺跡（金沢市）出土品を中心に実施した。

加えて平成25年に調査した徳田宮前遺跡（志賀町）、七尾城跡（七尾市）などについても実施した。（松山和彦）

瓦の採拓（金沢城跡）

土器の接合（能瀬南B遺跡）

大量の土師皿（能瀬南B遺跡）

特定事業調査グループ

上半期は長池カチジリ遺跡・横江古屋敷遺跡・長池ニシタンボ遺跡（野々市市・白山市、平成21・23・24年度調査）、福井ナカミチ遺跡（志賀町、平成23・24年度調査）、宮の奥経塚（小松市、平成23年度調査）の出土品整理作業を行った。

長池カチジリ遺跡は弥生時代から古墳時代の遺跡ということで、弥生土器を中心に記名・分類・接合から始まり、実測、トレース、遺構図トレースを行った。自身初めての作業のため戸惑うことがしばしばあった。

福井ナカミチ遺跡は土師器・須恵器を中心に整理した。特に目を引いたのは製塩土器であり、平底・尖底・支脚・焼き台など様々な形態のものが見られた。また、底部に文字が施された墨書土器や銅製帯金具なども実測・トレースした。

宮の奥経塚は8日間で土師器、陶磁器などの記名・分類・接合、実測・トレース、石製品・大型石製品などの実測・トレースを行った。（目黒陽子）

記名・分類・接合（福井ナカミチ遺跡）

木器の実測（福井ナカミチ遺跡）

石製品の実測（宮の奥経塚）

平成25年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録

はじめに

所長　福島　正実

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流をはかるものです。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、平成25年度で14回目の開催となりました。

本年度は日本海沿岸域から出土した舟に焦点をあて、その構造の変遷や使用形態を探るとともに、遺跡・遺構などを通じて、舟を使った活動や地域の水上交通の特質を明らかにしたいと考え、テーマを「舟と水上交通」としました。資料の集成や報告にあたられた皆様に感謝申し上げます。

1　主催　　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

2　会場　　石川県埋蔵文化財センター研修室

3　参加者　当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者、大学生等80名

4　内容及び日程

・事前の打合　　10月24日（木）午後3時～

・調査研究集会　10月25日（金）午前9時～午後4時30分

地域別報告

九州地方（福岡県）江野道和（糸島市教育委員会）

山陰地方（鳥取県）君嶋俊行（鳥取県埋蔵文化財センター）

北陸地方（福井県）小島秀彰（若狭三方縄文博物館）

北陸地方（石川県）金山哲哉（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

北陸地方（富山県）廣瀬直樹（氷見市教育委員会）

北陸地方（新潟県）岩野邦康（新潟市新津鉄道資料館）

東北地方（秋田県）伊藤直子（男鹿市教育委員会）

北海道地方　　鈴木　信（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）

討論

・資料見学会　　10月26日（土）午前9時～12時

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載（石川県埋蔵文化財情報）
第1回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える－	第11号
第5回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－壺・壺・擂鉢を中心に－	第15号
第7回	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－	第17号
第8回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－	第19号
第9回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H21.10.23	日本海域の土器製塩－その系譜と伝播を探る－	第23号
第11回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前陶磁から探る－	第25号
第12回	H23.10.28	中世日本海域の墓標－その出現と展開－	第27号
第13回	H24.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25.10.25	舟と水上交通	本号（第31号）

北部九州の船と交流　～伊都国を中心に～

江野　道和（糸島市教育委員会）

1．はじめに

北部九州は古来より、朝鮮半島・大陸と列島内各地とを結ぶ交流の重要な拠点であった。半島南部から対馬、一支を経て末盧・伊都・奴の各国に至るルートは、『魏志』倭人伝に記された当時の主要外交ルートと位置付けられている。本稿では、北部九州から出土した船に関係する資料の紹介を行った後に、日本海沿岸地域の交易の一例として玉作資料を取り上げる。

2．船の部材（第１図、表１）

糸島地域では、潤地頭給遺跡、上鎗子遺跡、今宿五郎江遺跡、元岡遺跡などで出土例がある。また、福岡県東岸の豊前地域では、延永ヤヨミ園遺跡から竪板が出土している。このうち、潤地頭給例は最も部材が充実しているといえ、６枚の船底部と１枚の舷側板の計７枚が出土している。船底部となる部材はそれぞれ長さ 1.2 ～ 1.5 m ほどで、厚みは 3.5 ～ 4.5cm程度、舷側板は、長さ 1.5m、幅 23cm、厚さ 4.5cmである。いずれにもほぞ穴が穿たれており、桜の皮が残されている穴もみられる。これは船底と舷側を綴るために使われた可能性があり、このことから準構造船であったと考えられる。

3．舟形木製品（第２図、表２）

弥生～古墳時代までの舟形木製品のうち、残りの良い資料としては福岡市の吉武樋渡遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡、長崎県の原の辻遺跡などの出土品がある。吉武樋渡例は長さ 58.5cm、最大幅 11.3cm、最大高 9.0cmで、長さ対幅の比は 5.1 対１となり、軸と艫の形態が異なるところに特徴がある。吉野ヶ里例は長さ 49cm、最大幅 7.2cmで、長さ対幅の比率は約７対１となり、全体的に細長く、舳艫が共に大きく反り上がる。右舷の縁に櫂座と考えられる凹凸が残っている。原の辻例は長さ 62.0cm、幅 13.3cm、高さ 9.5cmで、長さ対幅の比は 4.6 対１となり、他の２例と比べ幅広い。舷側板と船底部の接合部を表したと考えられる刳り込みや舳部に竪板を固定する可能性のある溝が彫られていることから準構造船を表した可能性がある。

4．絵画資料（第３図、表３）

絵画資料としては、土器に線刻された絵画と装飾古墳の壁画等がある。このうち、土器の絵画として、原の辻遺跡出土品は壺の頸部付け根付近に、ゴンドラ形の船が上下逆さまに描かれ、船の内側には櫂または漕ぎ手と考えられる縦線がびっしりと並ぶ。福岡県貫川遺跡出土品は、壺の肩部に船の絵が描かれる。舳艫が共に大きく反り上がり、中央部には長方形の箱形を載せ、船の下部には２本の櫂のような線が突き出る。

5．船の推進具（第４図、表４）

北部九州における最古の例としては、佐賀県の東名遺跡からの出土品があげられ、合計 26 本が報告されており、いずれも縄文時代早期とされる。弥生時代の例として、福岡市雀居遺跡出土品は先端が鋭利に尖っており、漕ぐだけではなく、竿のように水底を突いて船を動かした可能性がある。

6．船を介した日本海沿岸地域の交流（第５図）

北部九州と山陰・北陸地方との日本海沿岸交流を示す資料の一つに玉の製作が挙げられる。潤地頭給遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて大規模な玉作り集落が形成されるが、この原石である碧玉の多くは島根県花仙山産であることが判明しており、少量ではあるが、石川県菩提産や新潟県猿八産もある（藁科 2011）。

7．おわりに

潤地頭給と併行する時期に北部九州の玄界灘～響灘沿岸地域では玉作りを行う集落が展開していた。玉の原石や加工技術の搬入、製品の搬出等に船が活躍していたことは容易に想像され、この時期、日本海交易が活発に行われていたことを示す一つの証しといえる。

【引用・参考文献】

一瀬和夫　「船・ソリ」『古墳時代の考古学』5（同成社、2012 年）
江野道和　「伊都国の港と船」『伊都国の研究』（学生社、2012 年）
渡部俊哉　「肥前・壱岐の装飾古墳」『考古学ジャーナル』395（ニュー・サイエンス社、1995 年）
藁科哲男　「九州地方使用玉類の組成と同じ組成の玉類の使用圏について」『魏志倭人伝の末盧国・伊都国』（日本玉文化研究会、2011 年）

表１　主な船の部材一覧表　（弥生～古代、北部九州）

図	番号	資料名	遺跡名	遺構名	住所	時期	法量(cm)	樹種	出典	備考
1	1	舟材	潤地頭給遺跡	Ⅱ区　井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長 143	スギ	1	船底部 1
1	2	舟材	潤地頭給遺跡	Ⅱ区　井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長 142	スギ	1	船底部 2
1	3	舟材	潤地頭給遺跡	Ⅱ区　井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長 147	スギ	1	船底部 3
1	4	舟材	潤地頭給遺跡	Ⅱ区　井戸	福岡県糸島市	弥生終末		スギ	1	
1	5	舟材	潤地頭給遺跡	Ⅱ区　井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長 120	クスノキ	1	船尾部（艫？）
1	6	舟材	潤地頭給遺跡	Ⅱ区　井戸	福岡県糸島市	弥生終末		クスノキ	1	
1	7	舟材	潤地頭給遺跡	Ⅱ区　井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長 150	スギ	1	舷側板、ほぞ穴に桜の皮が残る。
		舟材	上鑵子遺跡		福岡県糸島市	弥生中期	長 108		2	舳？
		舟材	今宿五郎江遺跡	SD50	福岡県福岡市	弥生後期初頭	（長 147）		3	船底？
		舟材	今宿五郎江遺跡	SD50	福岡県福岡市	弥生後期初頭	（長 74）		3	船底？
		舟材	元岡遺跡		福岡県福岡市	弥生後期～古墳前期			2	未報告、隔壁？
		舟材？	拾六町ツイジ遺跡	（G－3）第3号土坑下層	福岡県福岡市	弥生前期後半	長（142.3）	クスノキ	4	
		舟材	延永ヤヨミ園遺跡	井戸	福岡県行橋市	弥生終末			5	未報告、竪板
		舟材	伊木力遺跡	遺物包含層	長崎県諫早市	縄文前期前葉～中葉	長（650）		6・7・8	船体
		舟材	興津出土		長崎県諫早市（森山町）				6	船体、[illegible]氏、安楽氏のご教授による。

表２　主な舟形木製品・埴輪一覧表　（弥生～古代、北部九州）

図	番号	資料名	遺跡名	遺構名	住所	時期	法量(cm)	樹種	出典	備考
	1	舟形木製品	今宿五郎江遺跡	SD100	福岡県福岡市	弥生後期初頭	（長 48.0）		1	
	2	舟形木製品	今宿五郎江遺跡	SD100	福岡県福岡市	弥生後期初頭	（長 41.5）		1	
	3	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 23.7		2	報 22、中央に窪形あり、舷側を残す。
	4	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 16.2		2	報 23、中央に窪形あり。
	5	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 18.2		2	報 24、中央に窪形あり、舷側を残す
	6	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 21.0		2	報 25、中央に窪形あり。
	7	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 20.5		2	報 26、中央に窪形あり。
	8	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 22.3		2	報 27、中央に窪形あり。
	9	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 19.6		2	報 28、中央に窪形あり。
	10	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 22.7		2	報 29、中央に窪形あり。
	11	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 17.5		2	報 30、中央に窪形あり。
	12	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 21.5		2	報 31、中央に窪形あり。
	13	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 17.0		2	報 32、中央に窪形あり。
	14	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 11.7		2	報 33、中央に窪形あり。
	15	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	（長 10.3）		2	報 34、中央に窪形あり。
	16	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	（長 8.4）		2	報 35、中央に窪形あり。
	17	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 10.8		2	報 36、中央に窪形あり。
	18	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 16.3		2	報 37、中央に窪形あり。
	19	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	（長 19.8）		2	報 38、中央に窪形あり。
	20	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 15.2		2	報 39、窪形無し
	21	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 12.9		2	報 40、窪形無し
	22	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 11.5		2	報 41、窪形無し
	23	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 18.8		2	報 42、窪形無し
	24	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 19.3		2	報 43、窪形無し
	25	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長 17.1		2	報 44、窪形無し
	26	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構SX123	福岡県福岡市	奈良（7～8C）	長 16.5		3	
	27	舟形木製品	拾六町ツイジ	3号土坑上層	福岡県福岡市	弥生後期初頭	（長 27.7）		4、5、6	
	28	舟形木製品	拾六町ツイジ	包含層	福岡県福岡市	古墳中期	長 30.4		7、5	
	29	舟形木製品	拾六町ツイジ	包含層	福岡県福岡市	古墳中期（5C前半）	（長 30.8）		7、5	
	30	舟形木製品	拾六町ツイジ	包含層	福岡県福岡市	古代？	長 17.4		7、5	
2	31	舟形木製品	吉武樋渡遺跡	旧河川01区	福岡県福岡市	古墳中期	（長 56.5）		8、5	
	32	舟形木製品	井相田C遺跡	SD01	福岡県福岡市	奈良（8C後半）	長 20.4		9、10	
	33	舟形木製品	高畑遺跡（板付第12次・C区）	SD01	福岡県福岡市	奈良～平安	長 15.3		11	
	34	舟形木製品	須玖永田遺跡	2号井戸	福岡県春日市	弥生後期	（長 21.5）		12	
	35	舟形木製品	須玖永田遺跡	2号井戸	福岡県春日市	弥生後期	（長 13.6）		12	
	36	舟形木製品	大宰府条坊跡	SD001下層	福岡県太宰府市	奈良（8C前半～中頃）	（長 35.7）		13、5	
	37	舟形木製品	大宰府条坊跡	SD001下層	福岡県太宰府市	奈良（8C前半～中頃）	長 18.4		13、5	
	38	舟形木製品	大宰府条坊跡	SD001下層	福岡県太宰府市	奈良（8C前半～中頃）	長 21.6		13、5	
	39	舟形木製品	大宰府条坊跡	SD001下層	福岡県太宰府市	奈良（8C前半～中頃）	―		13、5	
	40	舟形木製品	大宰府史跡	SD2340下層	福岡県太宰府市	奈良（8C前半）	長 4.8		14、5	
	41	舟形埴輪	瑞王寺古墳		福岡県筑後市	古墳中期（5C中頃）	（長 30）		15、16	
2	42	舟形木製品	吉野ヶ里遺跡（田手一本黒木地区232調査区）	SD40	佐賀県神埼市・吉野ヶ里町	弥生中期後半～後期前半	長 49.0	カヤ	17	櫂座の表現有。時期については細川金也氏からご教示頂いた。
	43	舟形木製品	吉野ヶ里遺跡（田手一本黒木地区298調査区）		佐賀県神埼町	弥生中期後半～後期前半	長 30		未報告	舟形容器か。細川氏、渡部芳久氏からご教示頂いた。
	44	舟形木製品	菜畑遺跡	包含層7層	佐賀県唐津市	弥生中期	（長 14.5）		18、10	艫部か。
	45	舟形木製品	中原遺跡	2区　SD256	佐賀県唐津市	奈良	長 30.5	マツ属		舷に竪板をはめ込むための溝有。
	46	舟形木製品	中原遺跡	2区　SD256	佐賀県唐津市	奈良	長 23.8	スギ		船底内部3ヶ所を深く彫る。
	47	舟形木製品	中原遺跡	2区　SD256	佐賀県唐津市	奈良	長 8.1			
	48	舟形木製品	中原遺跡	2区　SD256	佐賀県唐津市	奈良	（長 14.8）			舟形容器か。
	49	舟形木製品	石木遺跡	SD01、環路SX006	佐賀県小城市	古墳	長 45.5		20、5	
2	50	舟形木製品	原の辻遺跡	河川跡SD05	長崎県壱岐市	弥生中期	長 62.0		21、22	

表３　主な絵画関係資料一覧表　（弥生～古墳、北部九州）

図	番号	資料名	遺跡名	遺構名・描かれた位置	住所	時期	法量(cm)	出典	備考
	1	線刻土器	前田遺跡		福岡県太宰府市	弥生後期		1、2	
3	2	線刻土器	貫川遺跡		福岡県北九州市			3	
	3	彩色壁画	竹原古墳	後室奥壁	福岡県宮若市	6C後半		4～6、23	
	4	彩色壁画	五郎山古墳	玄室奥壁、玄室東側壁、玄室西側壁、前室北壁	福岡県筑紫野市			7、4、23、24	
	5	彩色壁画	瀬戸14号横穴	奥壁	福岡県中間市	7C前半		8、4、23	
	6	線刻壁画	土手の内横穴1号	奥壁	福岡県中間市	－		4、23	
	7	線刻壁画	垣生羅漢山横穴3a-1号	前室	福岡県中間市	7C前半～後半		4、23	
	8	線刻壁画	黒部6号墳	玄室左側壁、左玄門	福岡県豊前市	6C末～7C中頃		9、4、23	
	9	彩色壁画	原古墳	玄室奥壁	福岡県うきは市	6C後半		10、4、23	
	10	彩色壁画	鳥船塚古墳	玄室奥壁	福岡県うきは市	6C後半		4、23	
	11	彩色壁画	日岡古墳	玄室右側壁	福岡県うきは市	6C前半		11、4、23	
	12	彩色壁画	珍敷塚古墳	後室奥壁	福岡県うきは市	6C後半		4、23	
	13	彩色壁画	下馬場古墳	後室右側壁	福岡県久留米市	6C後半		12、4、23	
	14	彩色壁画	中原狐塚古墳		福岡県久留米市	6C後半		5、23	
	15	彩色壁画	西館古墳		福岡県久留米市	6C後半		5、23、22	
	16	彩色壁画	若宮古墳		福岡県久留米市	－		5	
	17	彩色壁画	寺徳古墳		福岡県久留米市	6C後半		23	
	18	彩色壁画	隈3号墳		福岡県久留米市	6C末		23	
	19	線刻壁画	稲荷山横穴		福岡県八女市			23	
	20	線刻壁画	倉永古墳		福岡県大牟田市	6C後半		5、23	
	21	彩色壁画	萩ノ尾古墳		福岡県大牟田市	6C後半		13、4、23	
	22	彩色壁画	[illegible]観音塚古墳	後室奥壁	福岡県筑前町	6C末		14、4、23	
	23	線刻壁画	狐塚古墳	後室奥壁、左右側壁	福岡県朝倉市	6C後半～7C前半		15、4、23	
	24	線刻土器	津古2号墳		福岡県小郡市	古墳前期		4	
	25	線刻壁画	花立山古墳		福岡県小郡市	古墳後期		5	
	26	彩色壁画	田代太田古墳	後室袖石、後室奥壁、中室右側壁	佐賀県鳥栖市	6C後半		16、4、23	
	27	線刻壁画	天山横穴	内壁	佐賀県多久市	6C末		4、23	
	28	線刻壁画	北の森古墳		佐賀県多久市	6C末～7C初		5	
	29	線刻壁画	古賀山4号横穴	内壁	佐賀県多久市	7C前半		4	
	30	線刻壁画	東山4号墳		佐賀県白石町	6C後半		5、23	
	31	線刻壁画	湯崎2号墳		佐賀県白石町	6C末		5、23	
	32	線刻壁画	勇猛寺古墳2号石室	玄室右側壁、玄室奥壁	佐賀県北方町	7C前半		17、4、23	
3	33	線刻土器	原の辻遺跡	石田大原地区	長崎県壱岐市	弥生中期後半	9.2×2.3	18	船のほかに鹿の絵有
	34	線刻土器	カラカミ遺跡		長崎県壱岐市	弥生後期		4	土器焼成後に線刻
	35	線刻壁画	鬼屋窪古墳	前室左側壁、右側壁	長崎県壱岐市	7C後半以降		19、18、23	後世の線刻である可能性も
	36	線刻壁画	大米古墳	棚石	長崎県壱岐市	6C末～7C初		20、18、23	後世の線刻である可能性も
	37	線刻壁画	[illegible]古墳	後室右側壁	長崎県壱岐市	7C前半		4	
	38	線刻壁画	兵瀬古墳	前室右側壁	長崎県壱岐市	6C末～7C前半		18、23	後世の落書きの下に船の線刻残る
	39	線刻壁画	百田頭5号墳	羨道部落石	長崎県壱岐市	6C後半～7C初		4、23	後世の線刻である可能性も
	40	線刻壁画	双六古墳	前室右側壁	長崎県壱岐市	6C中頃		4、23	後世の線刻である可能性も
	41	線刻壁画	長戸鬼塚古墳	前室左側壁	長崎県諫早市	6C末～7C前半		4、23	

表４　主な櫂状木製品一覧表　（縄文～古墳、北部九州）

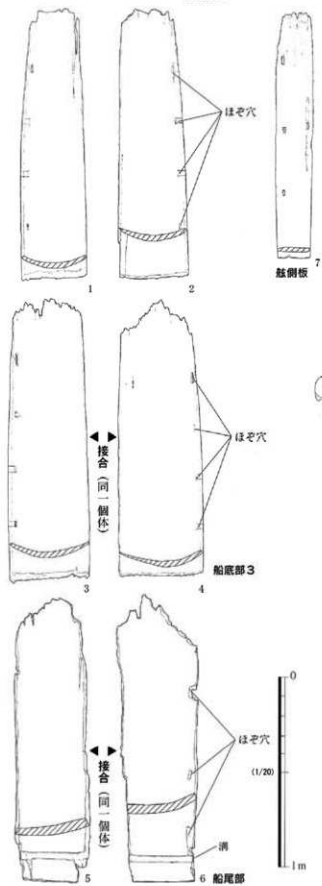
図	番号	資料名	遺跡名	出土地点・遺構	住所	時期	法量(cm)	樹種	出典	備考
	1	櫂状木製品	雀居遺跡	第4次調査SX12	福岡県福岡市	弥生前期末～中期前葉	長136.7	シイ	1～6	完形1
	2	櫂状木製品	拾六町ツイジ遺跡	第3号土坑	福岡県福岡市	弥生後期前葉	長109.7	(散孔材)	7、4～6	破片1
	3	櫂状木製品	拾六町ツイジ遺跡	第4号土坑	福岡県福岡市	弥生	長(56.2)	タイミンタチバナ	7、4～6	
	4	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長101.4	カシ	8、9、4～6	
	5	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長101.1	カシ	8、4～6	
	6	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長105.3	カシ	8、4～6	
	7	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長(98)	カシ	8、4～6	
	8	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長(90)	カシ	8、4～6	
	9	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長(82)	カシ	8、4～6	
	10	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長94.8	カシ	8、4～6	
	11	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長100.7	カシ	8、4～6	
	12	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長99.3	カシ	8、9、4～6	
	13	櫂状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長100.3	カシ	8、4～6	
	14	櫂状木製品	金山遺跡	Ⅶ区 B91 東側6層下層～7層	福岡県北九州市	弥生終末～古墳初頭	長72.7	アカガシ亜属	10、11、4～6	
	15	櫂状木製品	峰遺跡	1区4a・4b層	福岡県北九州市	弥生前期末～中期	長(82.4)		12、4～6	
	16	櫂状木製品	峰遺跡	1区4a・4b層	福岡県北九州市	弥生前期末～中期	長(13.8)		12、4～6	
	17	櫂状木製品	上鑵子遺跡	1区3層	福岡県糸島市	弥生中～後期	長(88.2)		4～6	
	18	櫂状木製品	浜口・三代遺跡群[illegible]地区	OMR区・第6区	福岡県新宮町	古墳前～中期	長100.8		13、3～6	完形1
	19	櫂状木製品	[illegible]川遺跡	1SX001	福岡県太宰府市	弥生時代後期～古墳前期	長(75)		14、4～6	
4	20	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(115.3)	ヒサカキ	15、4～6	報45
4	21	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層6	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(50.6)	クスノキ科	15	報46
	22	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層1	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(29.6)	ヤマハゼ	15	報47
	23	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚SK2056	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(66.1)	クスノキ科	15	報48
	24	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(32.0)		15	報49
4	25	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(40.8)	イヌガヤ	15	報50
	26	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層3	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(34.1)	クスノキ科	15	報51
4	27	櫂状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(36.0)	ニガキ	15	報52
4	28	櫂状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(14.2)	ヒサカキ	15	報53
	29	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(17.6)		15	報54
	30	櫂状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(17.0)	サカキ	15	報55
	31	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(18.1)		15	報56
	32	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(33.3)	マキ属	15	報57
	33	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(25.9)	ヒサカキ	15	報58
	34	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚[illegible]	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(24.0)		15	報59
	35	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層6	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(21.6)	ヒサカキ	15	報60
	36	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(18.8)	サカキ	15	報61
	37	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(19.1)	モッコク	15	報62
	38	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層1	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(19.7)	ヒサカキ	15	報63
	39	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(19.6)	カヤ	15	報64
	40	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層1	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(21.5)	ゴンズイ	15	報65
	41	櫂状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(19.2)	クスノキ科	15	報66
	42	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚SK2021	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(9.9)	カヤ	15	報67
	43	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層3	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(14.7)	クスノキ	15	報68
4	44	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(32.7)	サカキ	15	報69
4	45	櫂状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長(8.7)	サカキ	15	報70
	46	櫂状木製品	里田原遺跡		長崎県平戸市	弥生早期	長108		16、4～6、9	

（出典　表１）
1　前原市教育委員会「潤地頭給遺跡」（2005年）
2　伊都国歴史博物館「倭人の海道―玄海と伊都国」（2007年）
3　二宮忠司「福岡市　今宿五郎江遺跡Ⅱ」（福岡市教育委員会、1991年）
4　山口譲治・松村道博編「拾六町ツイジ遺跡」（福岡市教育委員会、1983年）
5　「発見！古代の交流拠点－延永ヤヨミ園遺跡の発掘現場から」「市報　ゆくはしNo.1096」（2011年7月1日号）
6　福岡市歴史資料館「古代の船」（1988年）
7　同志社大学考古学研究室編「伊木力・熊野神社発掘調査概報」（多良見町教育委員会、1985年）
8　同志社大学考古学研究室編「伊木力遺跡　第2次発掘調査概報」（多良見町教育委員会、1986年）

（出典　表２）
1　二宮忠司「福岡市　今宿五郎江遺跡Ⅱ」（福岡市教育委員会、1991年）
2　福岡市教育委員会「元岡・桑原遺跡群8　20次調査報告」（2007年）
3　福岡市教育委員会「元岡・桑原遺跡群12　7次調査報告」（2008年）
4　山口譲治・松村道博編「拾六町ツイジ遺跡」（福岡市教育委員会、1983年）
5　久保寿一郎「日本古代の船舶資料-舟形模造品資料集成」「九州考古学」61号（九州考古学会、1987年）
6　久保寿一郎「舟形模造品の基礎的研究」「東アジアの考古と歴史　下」（同朋舎、1987年）
7　福岡市埋蔵文化財センター「収蔵資料目録第1集　西区拾六町ツイジ遺跡Ⅰ」（1985年）
8　横山邦継・下村智「吉武遺跡出土の準構造船について-福岡市西区大字吉武桜町地区の調査」「考古学ジャーナル」241（1985年）
9　福岡市教育委員会「井相田C遺跡Ⅰ」（1987年）
10　福岡市歴史資料館「古代の船」（1988年）
11　福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書（9）」（1983年）
12　春日市教育委員会「須玖永田遺跡」（1987年）
13　太宰府町教育委員会「大宰府条坊跡　観世音寺土地区画整理に伴う発掘調査（1）」（1982年）
14　九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和58年度発掘調査概報」（1984年）
15　甘木市教育委員会「堤当正寺古墳」（2000年）
16　立命館大学考古学論集刊行会「原始・古代の船Ⅰ」（2013年）
17　佐賀県教育委員会「吉野ヶ里遺跡－平成8年度～10年度の発掘調査の概要」（2003年）
18　唐津市教育委員会「菜畑遺跡」（1982年）
19　佐賀県教育委員会「中原遺跡Ⅰ」（2007年）
20　佐賀県教育委員会「石木遺跡」（1976年）
21　原の辻遺跡保存等協議会「原の辻遺跡」（2000年）
22　林隆広「原の辻遺跡と舟」「原の辻ニュースレター」26（長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所、2006年）

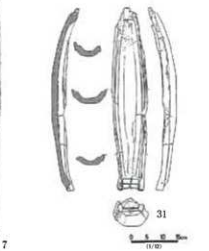
（出典　表３）
1　西日本新聞社「船の文様入り土器片を発掘」（1990年4月24日）
2　浅利幸一「土器に描かれた船－弥生・古墳出現期を中心として－」「北九州市文化財センター研究紀要Ⅱ」（財団法人北九州市文化財センター、1993年）
3　財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「貫川遺跡7」（1993年）
4　福岡市歴史資料館「古代の船」（1988年）
5　「九州の遺跡・古墳」（http://www.netpia.jp/history/kofun.htm）
6　金関丈夫「鞍手郡若宮町竹原古墳奥壁の壁画」「九州考古学」19（1963年）
7　九州考古学会「北九州古文化図鑑2」（1951年）
8　小田富士夫「福岡県瀬戸装飾横穴調査概報」「史淵」74（1957年）
9　玄洋開発株式会社「黒部古墳群」（1979年）
10　[illegible]「筑後に於ける二、三の装飾古墳の新例」「歴史と地理」14-1（1938年）
11　島田寅次郎「日ノ岡、月ノ岡古墳」「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第一輯」（1925年）
12　福岡県「石室古墳」「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第一輯」（1925年）
13　大牟田市教育委員会「大牟田市文化財解説」（1960年）
14　玉泉大梁「朝倉郡[illegible]観音塚古墳の調査」「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」7（1932年）
15　渡辺正気・[illegible]「筑前国朝倉郡狐塚古墳」「福岡県文化財調査報告書」17（1954年）
16　「田代太田古墳」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第一輯」（1928年）
17　佐賀県立博物館「装飾古墳の壁画」（1973年）
18　村川逸朗「壱岐島内「船」に関する線刻土器及び古墳の線刻壁画」「原の辻ニュースレター」24（長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所、2006年）
19　副島和明・木村幾多郎「鬼屋久保」「郷ノ浦町の古墳」（壱岐郷土館、1981年）
20　郷ノ浦町教育委員会「大米古墳」（2000年）
22　[illegible]「壱岐島の装飾古墳－西壁古墳を中心とした近年の調査成果」「月刊　考古学ジャーナル」395（ニュー・サイエンス社、1995年）
23　西山由美子「古墳に描かれた船」「装飾古墳の展開」埋蔵文化財研究会（2002年）
24　筑紫野市教育委員会「国史跡　五郎山古墳」（1998年）

（出典　表４）
1　力武卓治「雀居4」（福岡市教育委員会、2003年）
2　下村智「雀居遺跡2」（福岡市教育委員会、1995年）
3　吉田知史「日本原始・古代の櫂の研究」「待兼山論叢」（大阪大学大学院、2005年）
4　江野道和「原始・古代船の推進具（上）－研究史から考古資料の分類まで」「伊都国歴史博物館　紀要」3（2008年）
5　江野道和「原始・古代船の推進具（中）－縄文時代から古墳時代を中心とした推進具集成」「伊都国歴史博物館　紀要」4（2009年）
6　江野道和「原始・古代船の推進具（下）－縄文時代～古墳時代の推進具集成」「伊都国歴史博物館　紀要」5（2010年）
7　福岡市教育委員会「拾六町ツイジ遺跡」（1983年）
8　北九州市教育文化事業団「長行遺跡」（1983年）
9　山田昌久編「考古資料大観　8」（小学館、2003年）
10　出土木器研究会開催事務局、（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室、苅田町教育委員会「第3回　出土木器研究会資料」（2001年）
11　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「金山遺跡Ⅰ・Ⅴ区」（1999年）
12　財団法人　北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室「[illegible]遺跡第3次・峰遺跡第3次・長野フンデ遺跡（6D・6E区）」（2005年）
13　西田大輔「浜口・三代地区遺跡群　第4集」（新宮町教育委員会、1994年）
14　太宰府市教育委員会「太宰府・佐野地区遺跡群Ⅲ－[illegible]川遺跡第1次調査」（1996年）
15　佐賀市教育委員会「東名遺跡群Ⅱ」（2009年）
16　安楽勉「里田原遺跡」（田平町教育委員会）

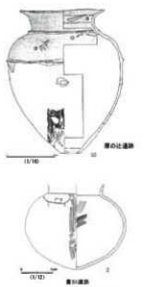


※船底部1と2は接合せず別個体。船底部3と船尾部のそれぞれの2枚については同一個体である。

第1図　潤地頭給遺跡出土準構造船部材



第2図　舟形木製品



第3図　線刻土器

第4図　櫂状木製品

第5図　日本海沿岸地域の交流（玉作り）

山陰地方の舟と水上交通～青谷上寺地遺跡出土資料を中心として～

君嶋　俊行（鳥取県埋蔵文化財センター）

青谷上寺地遺跡出土の舟

山陰地方の出土舟資料については、近年、鳥取市青谷町に所在する国史跡青谷上寺地遺跡において大幅な増加をみており（君嶋編 2012）、弥生時代の舟研究に新たな理解をもたらす内容を含んでいる。青谷上寺地遺跡は弥生時代を中心に繁栄した集落遺跡であり、三方を山に囲まれた青谷平野に立地する。弥生時代の青谷平野には潟湖（古青谷湾）が広がっており、青谷上寺地遺跡はこの内湾に臨む港湾集落であった。

青谷上寺地遺跡の実船資料は約50点に及び、船首の形状によって大きく2種類に分けられる。

Ⅰ型　平面形は舷側から船首にかけて内湾するカーブを描いて大きく幅を減じる。舷側縁には貫通孔を有する。Ⅰ型である第1図1は、船首へ至るカーブと孔の位置が大型船として知られる久宝寺遺跡（大阪府）出土竪板型準構造船とほぼ一致することから、Ⅰ型は久宝寺出土船と同形態の竪板型準構造船となる可能性が高い。

Ⅱ型　約30点の船首破片が確認されており、量的に青谷上寺地遺跡の舟の主体を占める。以下のような特徴を持つ（第2図）。

①船首の先端は、舷側から大きく幅を減じることなく、平面四角形に丁寧に加工される。

②船首は大きく反り上がる。その角度は底面の反り上がり開始位置で10°前後、先端付近では20°～25°となる。

③舷側上面は丸く収め、舷側板を載せるための加工が見られない。

④船内は二段に刳り込まれる。

⑤船首に方形の貫通孔（先端の縦孔）を持つ例が多い。この縦孔は左右1対で設けられたことが推測される。

⑥船首の底面側に、四角形の刳り込み（裏刳り込み）を持つ例が多い。貫通孔と刳り込みの位置関係にはバラエティーがある。なお、先端の縦孔と裏刳り込みの位置関係は多様であり定型化していないことから、両者はそれぞれ機能を異にするものと考えられる。

⑦船首の破片から原木の径を算出し本来の幅を復元し、既知の資料の長幅比を参考に長さを算出すると、Ⅱ型の船の多くは長さ6～12 mに復元される。

上記の特徴のうち①②については、「貫型準構造船」の特徴と一致するが、舷側上面に舷側板を載せるための加工が認められないという③の属性を重視するならば単材丸木舟ということになる。

青谷上寺地遺跡では、実船資料の他、8点の模型資料（舟形木製品）が出土しており、その形態は先述した実船資料に対応する形で2類型に分けられる。Ⅰ型を模したと考えられる模型（第3図1）の船首には竪板を嵌めこむ斜めの溝が表現されていること、Ⅱ型を模したと考えられる模型（第3図2）の舷側には舷側板を綴じるための孔が表現されていないことは、Ⅰ型が竪板型準構造船であり、Ⅱ型が丸木舟であるという先の推測を補強する状況証拠となる。

青谷上寺地遺跡における舟の利用景観

青谷上寺地遺跡において量的に主体を占めるのはⅡ型の丸木舟であり、これに少数の竪板型準構造船（Ⅰ型）が加わる組成となる。それぞれの所属時期について、模型を含めて整理すると、後者は弥生時代後期以降に認められるのに対し、前者は中期段階から存在する。弥生時代後期以降、大型船は

準構造船、中・小型船は丸木舟という構造の異なる舟が使い分けられていた点が、青谷上寺地遺跡の特徴であり、大型船から小型船まで竪板型準構造船が多用された琵琶湖沿岸とは異なる様相である（第１表）。このことは、縄文時代以来スギの大径木が入手しやすい環境にあり、強度に優れる丸木舟が好まれた結果と評価できよう（横田 2012）。

青谷上寺地遺跡の丸木舟の系譜

Ⅱ型の丸木舟は極めて規格性が高く、かつその形態は縄文時代の丸木舟と大きく異なる。船首・船尾が大きく反り上がる船形については、日本列島内外の絵画資料にいわゆる「ゴンドラ型」の舟が多く描かれており、外来要素である可能性も考えられる。船内を二段に刳り込む類例は、青谷上寺地遺跡以外には目久美遺跡（米子市）出土例のみが管見に及んでいる。模型資料では八日市地方遺跡（小松市）に同様の特徴を持つ例があり、北陸地方に船内を二段に刳り込む実船が存在したことを示唆する資料と言えよう。なお、これら２例は、船首の反り上がりはさほど顕著ではない。「船首（船尾）の反り上がり」と「船内の二段の刳り込み」は別個の系譜を持つ属性であり、それらが青谷上寺地遺跡において融合したのが、Ⅱ型の丸木舟であると考えられないだろうか。

まとめ

内湾に臨む港湾集落であった青谷上寺地遺跡では、大型の竪板型準構造船と、中・小型の特異な形態の丸木舟とが存在した。丸木舟の系譜を明らかにすることは今後の重要な検討課題であるが、船内を二段に刳り込む特徴については、北陸地方の舟にも存在する可能性がある。山陰と北陸との頻繁な往来を背景に、丸木舟に「地域型」が成立した可能性は充分に想定し得る。そしてこのことは、弥生時代後期以降に盛行した準構造船が画一的な構造を持つことと表裏の現象として評価する必要があろう。いずれにせよ、青谷上寺地遺跡独特の丸木舟は、実態の不明瞭な貫型準構造船と密接な関係にあることが予想され、その構造や系譜を明らかにするうえで重要な資料である。

なお、研究集会の資料では山陰地方の海岸地形や縄文時代の丸木舟、古代の水上交通についても触れたが、紙幅の都合で割愛する。

【引用・参考文献】

君嶋俊行編　2012 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告８　木製農工具・漁撈具』鳥取県埋蔵文化財センター

佐伯純也編　2003 『目久美遺跡Ⅶ』財団法人米子市教育文化事業団

塚本浩司編　2013 『弥生人の船　モンゴロイドの海洋世界』大阪府立弥生文化博物館

中川　寧　2009 「山陰の船～出雲市五反配遺跡の竪板と考えられる木製品～」『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』出土木器研究会

中原　斉　1998 「山陰の丸木舟」『考古学ジャーナル』№435、ニュー・サイエンス社

錦織　勤　2013 『古代中世の因伯の交通』鳥取県史ブックレット12、鳥取県

深澤芳樹　2003 「弥生時代の船、川を進み、海を渡る」『弥生創世記』大阪府立弥生文化博物館

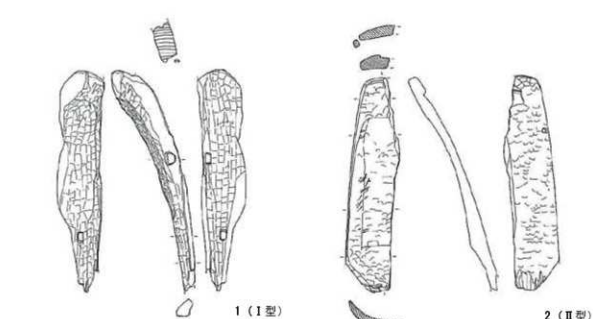
福海貴子・橋本正博・宮田明編　2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会

横田洋三　2004 「準構造船ノート」『紀要』第17号、財団法人滋賀県文化財保護協会

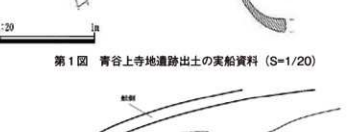
横田洋三　2007 「弥生時代の舟」『海と弥生人～みえてきた青谷上寺地遺跡の姿～』鳥取県教育委員会

横田洋三　2012 「青谷上寺地遺跡出土の船」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告８　木製農工具・漁撈具』鳥取県埋蔵文化財センター

【挿図の出典】第１・２図（君嶋編 2012）
第３図１（鳥取県教育文化財団 2001『青谷上寺地遺跡３』）、２（同 2002『青谷上寺地遺跡４』）



第１図　青谷上寺地遺跡出土の実船資料（S=1/20）



第２図　Ⅱ型丸木舟の模式図

第３図　舟形木製品（S=1/6）

第１表　青谷上寺地遺跡における船の利用景観（橋田 2012 を基に作成）

舟のタイプ	大きさ	使用場所	用途
竪板型準構造船（Ⅰ型）	20m 級（大型船）	外洋	遠方沿岸（九州～北陸）、朝鮮半島との交易
丸木舟（Ⅱ型）	12m 級（中型船）	近海	外洋魚の捕獲、近隣沿岸集落との交通手段
	6m 級（小型船）	潟湖・水路	漁撈・運搬・農耕用

福井県三方五湖周辺における舟と水上交通
－縄文時代～平安時代の出土資料から－

小島　秀彰（若狭三方縄文博物館）

はじめに

三方五湖周辺域は、若狭地方の中央に位置し、福井県若狭町と美浜町に属するが、滋賀県境と隣接・京都府境と近接しており、古来、これらの地域とのつながりも深い。本稿では、環日本海域に限らず、舟と水上交通の面で、これらの地域との関連性についても触れたい。

出土資料（第１・２図）

三方五湖周辺遺跡で丸木舟を出土したのは、鳥浜貝塚（縄文時代前期１艘・後期頃１艘）及びユリ遺跡（縄文時代後晩期９艘）である。各舟に共通する特徴としては、①いずれもつくりが浅い②材質がスギである③当時の湖岸（古三方湖岸）付近で出土していることである。

櫂は、鳥浜貝塚（縄文時代前期）、北寺遺跡（同後期）、ユリ遺跡（縄文時代晩期末・弥生時代後期～古墳時代）、田名遺跡（弥生時代後期～古墳時代）、江跨遺跡（同）から出土した。時代を超えて同一形態の櫂が存続しているが、羽子板形の柄頭は、縄文時代に特有である。また舟形木製品は、田名遺跡（９世紀後半以降）及び角谷遺跡（平安時代以降）で報告されている。

三方五湖周辺の水上交通

三方五湖のうち三方湖・水月湖・菅湖周辺は、近世までは、ほぼ淡水域であった。今のところ、出土資料から詳細に論じられるのは、この内水面交通に限られる。当地域の丸木舟の内面は、舷側の高さが16～25cm程度と低く、舟体の刳り方が浅い。特に縄文時代後期以降の丸木舟は、舟底をほとんど加工しない丸底のものと、平底のものとが併用されており、後者はより水深の浅い湖沼や河川での利用が想定される（清水編 2012）。出土舟による交通もこれらの淡水域に留まっていた可能性が高い。

また、首都大学東京と若狭三方縄文博物館が共同で実施した、丸木舟復元実験（小林・山田 2011）での所見によると、適正な定員は、縄文時代前期の鳥浜貝塚１号丸木舟復元舟（丸底）で４名、同後期のユリ遺跡１号丸木舟復元舟（平底）で２名である。前者を実際に漕いでみると、左右にローリングはするものの、湖沼や河川における通常の乗船で、舟内に水が浸入することはなかった。一方、後者は波のない河川において１名で漕いだ場合でも、櫂による水しぶきが舟内に常に浸入するため、遠距離の航行や外洋での利用を想定しにくい形態であると言える。

よって、舟の形態と実験結果に基づけば、縄文時代の三方五湖周辺における出土舟は、内水面交通向きであり、特に後期以降は、近隣での移動に重きを置いていたと想定できる。

一方、弥生時代以降の状況については、実際に利用された出土舟そのものが存在しないため、議論の幅は少ない。平安時代の舟形木製品の形態を見ると、縄文時代のユリ遺跡出土舟から大きな変化が見られないことに気付く。つまり、舟体の刳り方が浅く、ほぼ平底で、舷側が低い点が共通している。祭祀に利用された非実用品ながら、実用舟を忠実に模した木製品であることから、これらの形態が縄文時代後期以降、広く内水面交通に用いられた舟の形態であったと推定できる。

一方、外洋に面した若狭湾はリアス式海岸が続く地形である。海岸に近接した場所に分布する遺跡の発掘調査例は少なく、分布調査で確認できるのは製塩遺跡や散布地がほとんどである。一方、海産物が出土するため、間接的に外洋での活動を論じられる内陸側の遺跡として、鳥浜貝塚（マグロ属、マダイ亜科、ブリ属、サザエ等の動物遺体出土）、北寺遺跡（マグロ属出土）などが挙げられる（小島 2007）。これらの遺跡や近隣で出土した丸木舟は、先述のように内水面向きであることから、外洋

向きの別の丸木舟や漁港にあたる遺跡の存在が想定できるが、今のところ、これらを伴う遺跡は当該地域では未発見である。古墳時代以降、若狭湾岸には製塩遺跡が多く出現し、古代から平安時代まで遺跡が存続する場所もある。若狭湾岸の小川遺跡(古墳時代)では製塩土器や石錘なども出土しており、製塩を行いつつ、外洋で漁撈も行っていたと考えられる。

近世以降の若狭湾岸では、京都という大消費地を背後に抱え、「京は遠ても十八里」などと言われるように、人手によって一昼夜で鮮魚類を運搬することが可能であった。田名遺跡では、調塩の付札木簡も出土しており、藤原宮跡や平城宮跡でも、三方郡関係の付札木簡が出土している(田辺編1988)。少なくとも製塩の始まる古墳時代以降近世に至るまで、若狭地方と近畿地方とを結ぶ海産物流通があったと考えられ、船(舟)は海から漁村までの海産物の移送という最初の役割を担っていたと考えられる。ただし、塩を使った海産物の保存・貯蔵法の導入以前は、基本的に地産地消を基本とした生業・運搬に船(舟)が利用されていたと推定される。

隣接地域との関係

琵琶湖及び内湖を有する滋賀県域では、縄文時代の丸木舟が30艘以上と、日本最多の出土数を誇る(㈶滋賀県文化財保護協会編2007)。分布的には、湖北、湖東、湖西に拡がり、特に内湖が存在した湖東・湖北方面からの出土例が多い。時期的には、縄文時代中期に出現し、後晩期にその出土例を増加させる。利用場所としては、当然のことながら内水面に限定されている。なお、丸底の舟と平底の舟、横帯を持つものと持たないものとが同時期に併存するのは、若狭地方と共通している。

京都府では、舞鶴市で1例、向日市で2例の出土が報告されている(㈶滋賀県文化財保護協会編2007)。特に舞鶴市浦入遺跡出土舟(縄文時代前期中葉)は若狭湾に面した内湾の砂浜からの出土であり、外洋航行を目的とした舟として貴重な出土例である。最大幅約90cm、舷側の高さ40cmを測る。現存長は約500cmであるが、復元すれば800cm以上となり、内水面用の丸木舟とは規模が全く異なっている。ただし鳥浜貝塚の舟とよく似た形態であり、少なくとも縄文前期中葉の時点で、同形の舟が若狭湾近隣で外洋交通に利用されていたことの証左である。

おわりに

三方五湖における内水面中心の水上交通は、近世以後も、自動車による流通がスタートするまで、鉄道と組み合わされた形で継続していた。例えば、湖岸での農作業に舟を使い、渡船という形で人々の足となり、漁獲物、生産物、食料品、日用品等の一切の輸送手段となっていた(三方町立郷土資料館編1987・三方古文書を読む会編1990)。三方五湖周辺域では、重量物も問題なく運搬できる乗り物として、永い間、舟が有効に機能していたのである。

【引用・参考文献】

小島秀彰　2007「外洋性漁撈活動の存在へ評価－鳥浜貝塚における縄文時代前期の「痕跡」の検討－」『縄紋時代の社会考古学』同成社

小林加奈・山田昌久　2011「縄文時代丸木舟の復元製作実験」『人類誌集報2008・2009－遺跡資料の人類誌・実験考古学による人類誌－』首都大学東京人類誌調査グループ

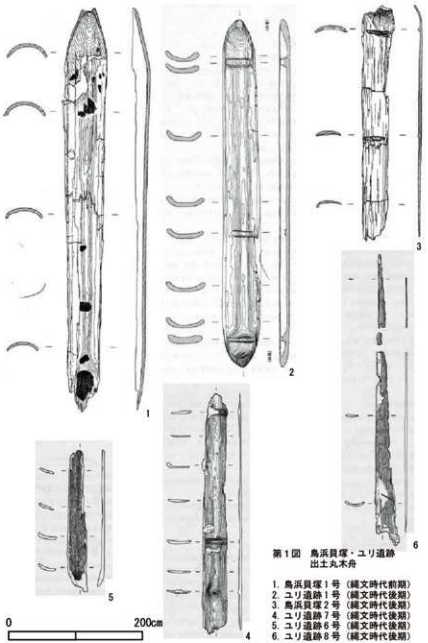
㈶滋賀県文化財保護協会編　2007『丸木舟の時代－びわ湖と縄文人－』サンライズ出版

清水孝之編　2012『ユリ遺跡－舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

田辺常博編　1988『田名遺跡』三方町教育委員会

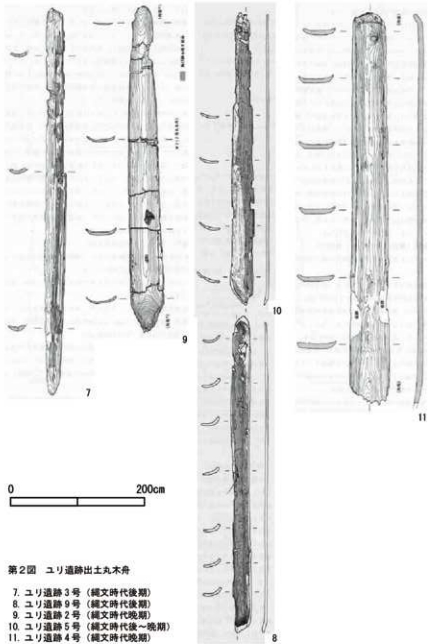
三方古文書を読む会編　1987『三方歴史ブックレット②　三方五湖の漁業(上)－久々子湖と気山川・浦見川－』三方古文書を読む会・三方町立図書館

三方古文書を読む会編　1990『三方歴史ブックレット③　三方五湖の漁業(中)－三方・水月両湖と鰣川－』三方古文書を読む会・三方町立図書館



第１図　鳥浜貝塚・ユリ遺跡
出土丸木舟

1. 鳥浜貝塚１号（縄文時代前期）
2. ユリ遺跡１号（縄文時代後期）
3. 鳥浜貝塚２号（縄文時代後期）
4. ユリ遺跡７号（縄文時代後期）
5. ユリ遺跡６号（縄文時代後期）
6. ユリ遺跡８号（縄文時代後期）



第２図　ユリ遺跡出土丸木舟

7. ユリ遺跡３号（縄文時代後期）
8. ユリ遺跡９号（縄文時代後期）
9. ユリ遺跡２号（縄文時代晩期）
10. ユリ遺跡５号（縄文時代後～晩期）
11. ユリ遺跡４号（縄文時代晩期）

石川県内の船関係資料

金山　哲哉（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

県内資料について

舟（船）材14遺跡52点、櫂14遺跡47点、アカ取り6遺跡13点、舟形43遺跡118点、絵画資料4遺跡4点、合計234点を確認した。船本体の資料は、七尾市三室トクサ遺跡出土の縄文丸木舟1点を除き、他はすべて弥生時代以降の準構造船材であり、半数以上が井戸側転用材として出土している。櫂については、最も古い資料では七尾市三引遺跡の縄文時代早期末～前期初頭まで遡ることができる。アカ取りは出土点数が少なく、形態的に農具のもみすくいとの区別の問題があり注意を要する。最も資料点数の多いのが舟形であり、関係資料の半数を占める。材質別では、木製品が108点、土製品が9点、金属製が1点となっている。弥生時代から確認され、時代ごとの形状の変化が注目される。絵画資料は、遺物（土器、琴板）、遺構（横穴壁面）に描かれたものの2種が確認された。

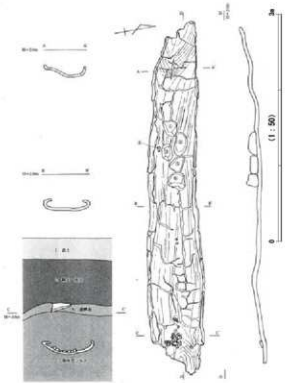
各時代の船と水上交通

七尾市三室トクサ遺跡出土丸木舟（縄文時代前～中期）は、舷側板をもたない縄文時代の単材刳舟である。能登町真脇遺跡や七尾市三引遺跡の櫂の出土例から、縄文時代前期にはこれらの遺跡の前面に広がる内湾を舞台に、丸木舟を用いた活発な漁労活動が展開していたものと考えられる。

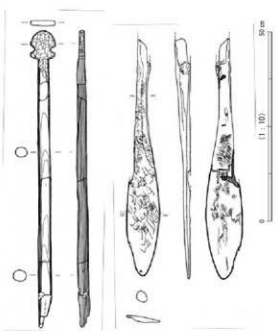
丸木舟は弥生時代においても使い続けられたと考えられるが、同後期以降の舟形に、舷側板を取り付けるためとみられる穿孔を船べり部分に施した資料や、船首尾に竪板を意識した切り込みを施した資料など、準構造船を模した資料が確認されるようになる。金沢市畝田西遺跡群出土の舟形の部材とみられる竪板（古墳時代前期）は、実物の竪板を小型化したかのように精緻に作り込まれたものである。実船資料でも、加賀市錦橋遺跡の舷側板（弥生時代終末）や、小松市千代能美遺跡の竪板（古墳時代前期）などの船材が出土しており、弥生時代後期～古墳時代前期の加賀地域には竪板型の準構造船が出現していたものと考えられる。これらの船が外洋を目指したか否かは不明とせざるを得ないが、出土遺跡を拠点に活躍したであろうことは想像に難くない。

古墳時代以降の船材資料は、井戸枠転用の船底部が主体となる。これらの船底部には弥生時代同様に丸木舟が用いられ、船べりに舷側板を取り付けるためとみられる加工（端部の平坦化、方形のホゾ孔等）が施されている。民俗例にみられるような、木材を接合するチキリ技術は弥生時代後期には既に確立していたと考えられるが、造船にチキリを用いた例は確認できない。その他の造船技術についても、小松市額見町遺跡出土の船底部（平安時代）に船梁とみられるホゾ孔が確認されるのみであり、中世に至るまで船底材の加工痕跡からみえる造船技術に大きな変化はない。一方で、形状を変化させているのが舟形である。古墳時代にはその殆どが船首尾ともに尖る平面形であった舟形が、奈良・平安時代以降、舳先は尖るものの、艫部は角形を呈する平面形状のものが現われ、中世にはほぼ例外なく同形状を呈するようになる。このような船尾形状の変化は、櫂から櫓への推進具の変化を物語ると考えられるが、現在の船材資料では欠落した部分であり、現段階ではその可否を明らかにし得ない。

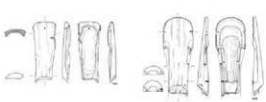
文献史料上の古代能登には、ヤマト王権によって設置された造船を職掌とする船木氏の分布が散見され、同氏により東国征討のための軍船を建造された可能性が指摘されている。彼らがその素地となったかは定かではないが、大伴家持の能登巡行の移動手段に船を含め得る交通環境は、家持の歌から察せられる能登の盛んな造船活動を背景にもたらされたものであろう。弥生～古墳時代の竪板型準構造船にも増して、古代～中世の船は資料が少なく不明な点が多い。舟形にみえる形状変化を確認できるような、実船資料の増加が期待される。



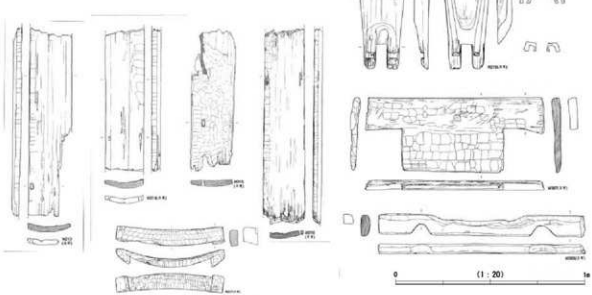
三室トクサ遺跡・丸木舟（S=1/50）



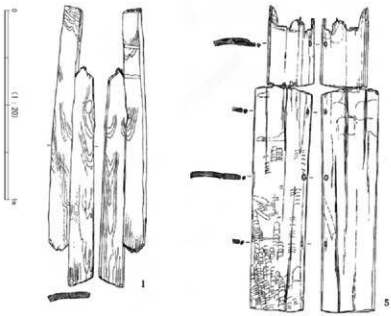
真脇遺跡・櫂（S=1/10）　三引遺跡・櫂（S=1/10）



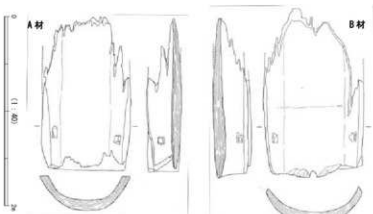
畝田西遺跡群・竪板（舟形）（S=1/20）



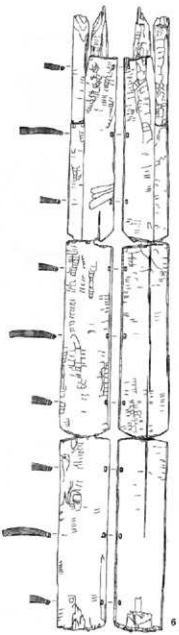
千代・能美遺跡・竪板ほか、準構造船材（S=1/20）

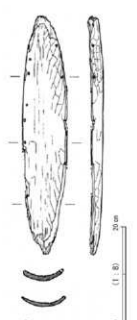


1・5・6：猫橋遺跡・準構造船材（舷側板）（S=1/20）

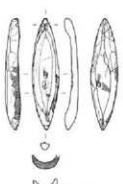


額見町遺跡・準構造船材（船底部）（S=1/40）





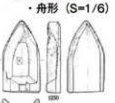
梅田B遺跡・舟形（S=1/8）



千代・能美遺跡
・舟形（S=1/6）

田尻シンベイダン遺跡
・舟形（S=1/6）

善正寺高畠遺跡
・舟形（S=1/6）



上町カイダ遺跡
・舟形（S=1/6）

富山県の出土船について

廣瀬　直樹（氷見市教育委員会）

はじめに

日本の船は、丸太を刳って造る単材丸木舟から複数の刳材を前後や左右に継いだ複材丸木舟へ、さらに刳材に板を接ぎ合わせた準構造船、板材で造る構造船へと変化してきた。単材丸木舟では、材料となる丸太の大きさによって船の大きさも制限されてしまうが、船の使用目的である運搬や人の移動、あるいは漁撈のためには、より大型化して積載量を増やしてやる必要があった。そのため単材丸木舟から、大型化、構造船化の方向で変化する、というのが大きな流れである。古くから漁業が盛んであり、オモキ造りなど在地の造船技術が発達した富山県においても、同様の発達過程が想定されるが、船の出土例は少ない。ただ、平成15年度に氷見市鞍川D遺跡で12世紀代の丸木舟が出土して以降、能越自動車道や北陸新幹線の整備に伴う発掘調査で縄文時代の丸木舟の出土が相次いだ（第1図）。

縄文時代

縄文海進期の湾奥部に形成された縄文時代早期から後期の貝塚、氷見市上久津呂中屋遺跡でスギ製の丸木舟断片が出土しており、放射性炭素年代で縄文時代中期後葉のものという。箱型の横断面は近代の川舟や潟舟にも通じ、遺跡の立地から潟湖化した元の入り江で使用されたものと推測される。

富山市小竹貝塚では、丸木舟の先端部分約2.6mが出土している。縄文時代前期中葉の低湿地板敷遺構に転用されたもので、端部左右両側に施された蕨手形の加工が特徴的である。詳細については報告書の刊行を待たなければならないが、後に放生津潟となる入り江の奥部で使用されたものだろうか。

弥生時代から古墳時代

丸木舟の複材化、大型化が進む弥生時代であるが、富山県内では船に関する情報はほとんどない。現時点では、富山市豊田大塚・中吉原遺跡で、弥生時代後期から終末期の沼跡より伏せた状態の舟が出土したと報告されているのが唯一の例である。

古墳時代も船の出土はないが、一方で日本海を介した交易の一端がうかがえる遺跡がある。氷見市の国指定史跡、柳田布尾山古墳（全長107.5m）は、日本海に面する地域に築造された前方後方墳としては最大の規模を持つ。富山湾を望む丘陵上に立地し、海岸線と平行に築造されていること、築造当時の古墳直下には潟湖があり、天然の港として活用されていたと推測されることから、富山湾を基盤に海上交通を掌握した広域首長連合の長という被葬者像が想像される。同じく氷見市の朝日長山古墳では、朝鮮半島の伽耶地域の系譜を引く冠帽や馬具の剣菱形杏葉が出土している。被葬者は富山湾に君臨する国際派の地域首長連合の一員であり、その勢力基盤が富山湾のみならずコシの海域を対象とした海人の交易活動にあった、とされる。こうした古墳時代の首長たちの動向には、積載性に有利な準構造船形式の船を利用した海上交易が想定されるが、その物的な証拠となるものはない。

古代

『万葉集』の編者、大伴家持が越中国守として赴任していた天平18年（746）から天平勝宝3年（751）の5年間、家持は氷見に所在した潟湖、布勢水海に舟を浮かべて遊覧し、舟や舟人、海人を歌に詠んでいるが、舟自体への具体的な言及はない。一方、『万葉集』には8世紀前半頃に詠まれた三首の歌に「棚無し小舟」という語がある。「棚」とは棚板、つまり舷側板で、それが無い単材の丸木舟を指す。この「棚無し小舟」という言葉から、小舟ではない大型の船は棚板が設けられた準構造船形式の船だったことが読み取れ、また奈良時代には丸木舟と準構造船が並存していたと推測できる（第2図）。

県内では、高岡市東木津遺跡で溝の護岸に用いられた板材が、切り欠きや等間隔に並ぶ穴の加工か

ら準構造船の棚板を転用した可能性が指摘されている。溝から8世紀前半～9世紀代の遺物が出土しているため、板材は8世紀前半以前のものであろう。溝跡出土の8世紀代の須恵器には、「舩木」の墨書が残るものがあり、造船に関連すると推測される能登国の氏族、舩木氏との関連が想定される。

平安時代末～中世

平安時代末から中世の資料として、井戸側に転用された丸木舟の出土が氷見市で2例ある。

鞍川D遺跡は、氷見市の中央を流れる上庄川の下流南岸に位置する。丸木舟は輪切りの2部材を組み合わせて井戸側に転用してあった（第3・4図）。スギ製で、丸木舟製作時の工具痕や、埋木・カスガイ等の補修痕、井戸側転用時の鋸痕、フナクイムシやキクイムシによる食害痕が残る。食害痕は底面のみで舷側外面にはないが、これは舟の喫水が非常に浅かった証拠となる。また、フナクイムシなどの食害痕の存在は、海水域から汽水域、すなわち海から河口部にかけて使用・繋留されていたことを示す。放射性炭素年代測定では11～12世紀代、井戸の構築が13世紀前半であることから、丸木舟の建造は12世紀代以前と推測される。船首側の（a）舷側上部には「コ」の字形の切り欠きと方形孔があり、船梁や波除板が設けられていたものと推測される。また底内面の不整形の埋木は、フナクイムシなどによる食害で開いた穴をふさいだものであろう。船尾側の（b）は、井戸側転用前にすでに割れが生じていたようで、それをカスガイで接合してあった。舷側上部には方形孔が複数あり、一部には縄をかけたために生じた磨耗痕が残る。これは櫓櫂をかける早緒の跡と、舷側上部に構造物を固定するための縄の跡が混在しているものとみられる。（a）と（b）は断面形状が大きく異なっており、丸底で深い（a）と平底気味で浅い（b）をつなぐには、中間部分に最低でも4m程度必要となる。船首・船尾部分も含めると、丸木舟の全長は10m程度と推測され、これは単材丸木舟としては大型の部類となる。第5図は、日本海側の古代から中世の出土丸木舟をサンプルとした幅と深さの分布図だが、全体に幅と深さの比が2：1に集中するのに対し、鞍川D遺跡例は（a）（b）ともに1.4：1となり、幅に対して深いという特徴がある。船体の深さや船底の厚さは、海での操船や波切りの面で有利であり、もうひとつの特徴である喫水線の浅さによって大量の積荷が可能だったと推測される。

鞍川D遺跡の南西約1.7km、同じく上庄川南側平野部に立地する中尾新保谷内遺跡で井戸側に転用された丸木舟もスギ製で、幅と深さの比は1.8:1と鞍川D遺跡例と比べてやや平底気味の形状を持つ。井戸は12世紀後半～13世紀前半、丸木舟の放射性炭素年代は8～10世紀を示す。外面にフナクイムシないしキクイムシによる食害痕があり、鞍川D遺跡例と同様、海で使用されたと考えられる。

近世以降の動向

14世紀には縦挽きの製材用鋸が出現し、本格的な構造船の時代が到来する。日本海沿岸ではオモキ造りと総称される船体構造とその建造技術が発達し、近世にはその存在が確認される。オモキ造りは準構造船に分類されるもので、船底部左右両端にオモキと称する剞材を用いた平底の船形、接合に木製カスガイのチキリや木栓のタタラ、接着剤としてウルシを用いるという共通点がある。近世前半期の日本海海運を担った北国船や羽賀瀬船もオモキ造りだったが、櫓櫂による操船に多数の水主が必要なため、帆走性能に優れた弁才船の普及により18世紀には衰退した。だが、定置網や地曳網などの沿岸漁業ではオモキ造りの船が存続し、富山湾から能登半島内浦では、定置網漁の網船にオモキ造りの大型船ドブネが使用された（第6図）。昭和30年代まで活躍したドブネだが、より操船しやすく動力化も可能だった板合わせの構造船テントに取って代わられ、そのテントもＦＲＰなど新素材の船の普及により昭和40年代には姿を消した。日本列島全体では、男鹿半島などで単材丸木舟が存続し、津軽海峡にムダマハギ、日本海沿岸にオモキ造りといった準構造船があったように、木造船が終焉を迎える近年まで丸木舟、準構造船、構造船が並存していたということは強調しておく必要があるだろう。

【引用・参考文献】

公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2013 「上久津呂中屋遺跡発掘調査報告 ―能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告X―」

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2009 「中尾茅戸遺跡　中尾新保谷内遺跡　神明北遺跡　大野江湯遺跡　発掘調査報告 ―能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅷ―」

高岡市教育委員会　2001 「石塚遺跡・東木津遺跡調査報告」

富山県埋蔵文化財センター　2011 「特別展図録　とやまの貝塚　―貝塚からみえてくる縄文人の姿と生活―」

富山市教育委員会　1998 「富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要」

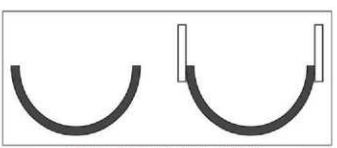
氷見市　2002 「氷見市史」 資料編５考古

氷見市教育委員会　2006 「鞍川D遺跡　鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅱ」

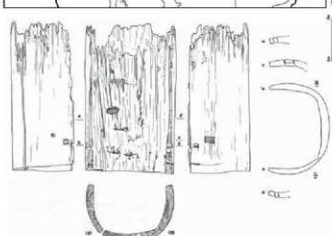
廣瀬直樹　2005 「鞍川D遺跡出土の丸木舟　－出土丸木舟に残る加工痕・使用痕への試論－」「船をつくる、つたえる　和船建造技術を後世に伝える会調査報告書」

藤田富士夫　2002 「朝日長山古墳出土の金銅製品とその意義」「氷見市史」資料編５考古 氷見市

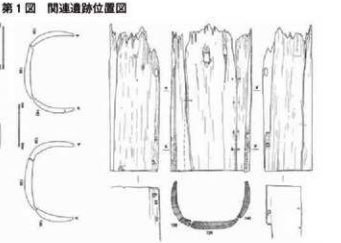
第１図　関連遺跡位置図



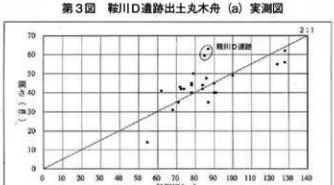
第２図　棚無し小舟（左）と準構造船



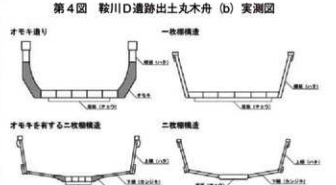
第３図　鞍川D遺跡出土丸木舟（a）実測図



第４図　鞍川D遺跡出土丸木舟（b）実測図



第５図　日本海沿岸地域出土丸木舟の深さと幅



第６図　富山湾周辺地域の和船断面模式図

新潟県における舟と水上交通

岩野　邦康（新潟市新津鉄道資料館）

はじめに

新潟県では1990年代以降、舟・水上交通に関係する発掘事例が増えている。従来の発掘成果とそれらを俯瞰し整理した研究を鶴巻康志が行っている（鶴巻 1999,2006）。本稿では鶴巻の整理に依拠し、あわせて発表者の主たる関心領域である新潟県下越地方の平野部における木造船の民俗例を紹介する。

出土した丸木舟・舟材

新潟県内では、中～下越地方の信濃川・阿賀野川下流域での出土例が多く、上越・佐渡地方の出土例が少ない傾向がある。また、ほとんどの事例が井戸枠に転用された材であるため、船首・船尾構造が推測できるものは少ない。

【縄文時代】

縄文時代晩期末の丸木舟が②青田遺跡（丸数字は図1、表1と対応）から出土している。山田昌久は、この船の特徴として、1．船底部が平坦にカットされているということ、2．船体の作りが薄いことを上げている（山田 2004）。

【弥生時代】

④加治川分水路開削工事の際、1923（大正12）年に船底材が出土している（鶴巻 1999）。刳り残しの横梁構造をもつ。

【古墳時代】

船底の可能性のある転用材が⑥腰廻遺跡から出土している。

【奈良平安時代】

ホゾ穴、チキリ穴、釘穴、カスガイ痕のある井戸枠転用舟材が出土している。（⑤曽根遺跡、⑨小丸山遺跡、⑭沖ノ羽遺跡⑯羊ノ木遺跡、⑱木崎山遺跡）。⑲古川遺跡（図5）のものは刳り残しの横梁構造をもつ。⑫川根A遺跡からは1951（昭和26）年に古代の丸木舟が出土している。

【鎌倉室町時代】

タタラ穴、ホゾ穴、釘穴痕のある井戸枠に転用された舟材が出土している。（⑦下前川原遺跡、⑧山木戸遺跡、③住吉遺跡）。

【江戸時代】

⑮馬場屋敷遺跡から板舟の舳板を転用した井戸枠が出土している。舟釘、チキリなどが使用されており、民俗例のイタアワセ、ナガフネなどの板舟と同じ技術を用いたものである。

水上交通関係の遺構

①蔵ノ坪遺跡からは平安時代の「津」の文字のある墨書土器、「少目御館米五斗」「□□□□所信」の文言のある荷札木簡が出土しており、荷札のついた米俵は、他所から紫雲寺潟を利用して船で運ばれてきたものと考えられている。

⑩駒首潟遺跡・⑰門前遺跡などの川岸に位置する遺跡では、平安時代の建物の遺構とともにテラス状の平坦面が見つかっている。これらは荷揚げ、荷さばきを行う河岸的な役割を担っていた可能性が高い。

舟の構造（その変遷）や使用形態、造船技術―蒲原平野の民俗例から

越後の木造和船の特徴として、海岸部、内水面ともに刳材を使用するオモキ造りの船と板舟が併存していた点があげられる（表2）。

【ナガシブネの板船化】

赤羽正春はもともとオモキ造りの船だった阿賀野川河口のナガシブネが、オモキの位置に角材を利用することによって板舟化していったことを報告している。刳舟が板舟に変化していく事例として興味深い。信濃川河口のチョロ（オモキ造り）と阿賀野川河口のナガシブネは歴史博物館 2007)、前者は新潟市歴史博物館が、後者は新潟市北区郷土博物館がFRPで巻かれた状態の船を収蔵している。なんらかの方法で断面構造を比較したい。

【点在する刳舟型田舟】

蒲原平野に広がる湿田地帯では、農家が家ごとにイタアワセを所有し使用する「船農業」が近世期の新田開発以降に発達した。湿田の中で稲を運搬する大型の田舟であるキッツォは、イタアワセと同じ一枚棚構造である。ところが蒲原平野各地の博物館・資料館に、刳る技法のみで製作したキッツォ（刳舟型田舟）が収蔵されている。現在出土例、民俗例などからこの舟の分布・使用形態について調査している。

【下越地方の刳舟と板舟の分布】

下越地方の民俗例では、阿賀野川河口より北にオモキ造りの海船がない。北蒲原郡海岸部より北には、一本水押二枚棚構造のカワサキ型の海船のみが分布している。一方、阿賀野川河口より西側には、ナガシブネ、チョロ、ドブネなどのオモキづくりの海船が分布している。オモキづくりではないが、船首、船尾の構造に刳舟の痕跡と思われる特徴をもつマルキも多数使用されていた。

内水面に目を転ずると、胎内川・加治川流域より北は、川漁に使用する刳材を用いたカワフネが分布し、南西には湿田地帯の農家が使用した一枚棚構造の板舟であるイタアワセが分布している。こういった分布状況は、造船技術というよりも、船に対する需給バランスが大きな影響を与えていると考えられる。

図1　新潟県内の出土事例

表1 新潟県内の出土事例

No	遺跡名	所在地	出土資料・遺構	時代・特徴・備考
①	蔵ノ坪遺跡	胎内市(旧中条町)船戸	「津」の墨書土器・荷札木簡	平安時代
②	青田遺跡	新発田市（旧加治川村）金塚	丸木舟	縄文晩期
③	住吉遺跡	新発田市(旧紫雲寺町)中島	井戸枠転用舟材	鎌倉時代(13～14C 前半)
④	次第浜 （加治川分水路）	新発田市次第浜	丸木舟	弥生～古墳初
⑤	曽根遺跡	新発田市(旧豊浦町)竹俣万代	井戸枠転用舟材	平安時代（9C）チキリ
⑥	腰廻遺跡	阿賀野市(旧笹神村)山倉	転用舟材	古墳時代
⑦	下前川原遺跡	新潟市北区(旧豊栄市)三ツ森川原	井戸枠転用舟材	鎌倉時代(13C)舷側のホゾ穴など
⑧	山木戸遺跡	新潟市東区山木戸	井戸枠転用舟材	鎌倉時代(14C 中葉)。タタラ。釘穴など
⑨	小丸山遺跡	新潟市江南区大江山	井戸枠転用舟材	平安時代(9～10C)チキリ。釘穴など
⑩	駒首潟	新潟市江南区(旧亀田町)亀田新通	テラス状遺構	平安時代(9C)
⑪	緒立C遺跡	新潟市西区黒鳥	井戸枠転用舟材	古代
⑫	川根A遺跡	新潟市秋葉区（旧新津市）川根	丸木舟	古代？
⑬	*大沢谷内遺跡	新潟市秋葉区(旧小須戸町)	井戸枠転用舟材	鎌倉時代。現地説明会資料より
⑭	神ノ羽遺跡	新潟市秋葉区(旧新津市)	井戸枠転用舟材	平安時代(9C)
⑮	馬場屋敷遺跡	新潟市南区(旧白根市)庄瀬	井戸枠転用舟材	江戸時代(19C)。板船
⑯	半ノ木遺跡	三条市（旧栄村）岡野新田	井戸枠転用舟材	平安時代(9C)ホゾ穴
⑰	門新遺跡	長岡市(旧和島村)上桐	テラス状遺構。延長 6 年漆紙文書	平安時代(10C)
⑱	木崎山遺跡	上越市吉川区	井戸枠転用舟材	平安時代。カスガイによる補修
⑲	古川遺跡	上越市吉川区(旧吉川町)大乗寺	井戸枠転用舟材	古代。横梁状刳残し

表2　蒲原平野の主な木造和船

1. 海の船

船型名	テンマ	マルキ	トブネ	サンパ	テント	カワサキ	ベザイ
船首の構造	水押づくり	ジョー	ハナキリ※	水押づくり			水押づくり
シキ・タナの構造	一枚棚	一枚棚	オモキづくり	二枚棚			三階づくり （タナ板が三枚）

2. 河口の船

船型名	チョロ	ナガシブネ
船首の構造	（オッタテか？）	（オッタテか？）
シキ・タナの構造	オモキづくり	オモキづくり

3. 内水面の船

船型名	オシアゲブネ	刳舟型田舟	キッツォ	イタアワセ	ナガフネ	コウレンボウ
船首の構造	（オッタテづくり）	—	オッタテづくり			コウレンボウづくり
シキ・タナの構造	（一枚棚）	丸木舟	一枚棚			4枚の側板をアバラで支える構造

【参考文献】

赤羽正春　1981 「新潟県川舟造船技術の系譜―川舟から海船へ―」『民具マンスリー』14-9
笹神村教育委員会編　2002 『腰廻遺跡』
清水潤三　1955 「新潟県中蒲原郡川根丸木舟」『日本考古学年報』3
新保誠吾　2000 「竹直下片南部遺跡・古川遺跡」古川町教育委員会
豊栄市教育委員会編　2004 「下前川原遺跡」
鶴巻康志　1999 「加治川分水出土の丸木舟と弥生土器」『北越考古学』10
鶴巻康志　2006 「新潟平野における古代・中世の刳舟について」新潟考古学会談話会発表
豊浦町教育委員会編　1981 『曽根遺跡 Ⅰ』
豊浦町教育委員会編　1982 『曽根遺跡 Ⅱ』
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編　2002 『蔵ノ坪遺跡』
山田昌久　2004 『青田遺跡　本文・観察表編』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編
新潟県教育委員会編　1973 『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』
新潟県教育委員会編　1992 『木崎山遺跡』
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編　2003 『沖ノ羽遺跡 3（C地区）』
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編　2004 『青田遺跡　図面図版編』
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編　2009 『西部遺跡Ⅳ・桜林遺跡Ⅲ』
新潟市教育委員会編　1987 『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』
新潟市教育委員会編　2004 『新潟市山木戸遺跡』
新潟市史編さん原始古代中世史部会編　1994 『新潟市史　資料編1　原始古代中世』
新潟市埋蔵文化財センター編　2009 『駒首潟遺跡　第3・4次調査』
新潟市歴史博物館　2007 『船と船大工』
新津市教育委員会編　2000 『川根遺跡発掘調査報告書』
古川百作　1982 「川根の丸木舟発掘」『新津郷土誌』9
和島村教育委員会編　2005 『門新遺跡　谷地地区Ⅱ』

秋田県における舟

伊藤 直子（男鹿市教育委員会）

1　はじめに

秋田県では、平成に入ってから、日本海沿岸自動車道の建設、圃場整備等に係る発掘調査により、沿岸部の調査が進み、低湿地の調査事例も増加した。木材、木製品、植物という当時の生活色を色濃く残す遺物も出土し、現存する民俗事例との比較なども可能となった。ここでは秋田県の沿岸地域の出土例、民俗事例を紹介する。

2　出土事例

秋田県の舟材や舟形の出土は、沿岸中央部の男鹿半島と旧八郎潟沿岸域に集中する。低湿地の調査が多いことが一因であるが、この地域は古くから湊、漁場として機能していた。男鹿半島は、東北日本海側では唯一の半島であり、いち早く目に入る陸地であった。八郎潟は男鹿半島の付け根から海へとつながり、この周辺は豊富な漁場、天然の良港として活用されていた。

古代には4～5世紀代の土壙墓群が八郎潟から北へ6kmの能代市寒川Ⅱ遺跡で確認され、その副葬品として続縄文時代の後北C式土器が出土した。その経路は明らかではないが北方交流があったことを示す。8世紀では、阿倍比羅夫が180艘の船団を連ねて秋田、能代、津軽、道南まで北上した斉明天皇4年(758)の遠征の記述（『日本書紀』）があり、現在の秋田市にある秋田湊とその経由地として男鹿半島や旧八郎潟もまた湊として機能していた。また、元慶2年（878）、秋田城が焼き討ちされた俘囚の反乱である元慶の乱では、旧八郎潟周辺から秋田城を襲撃している（『藤原保則伝』）。この際、相当数の舟を八郎潟周辺で調達していた。その八郎潟は、琵琶湖についで2番目の広さの湖だったが、昭和30～40年代に干拓され、周囲の残存湖を残し陸地化されており、現在は大規模な水田地帯となっている。

■　古代

八郎潟周辺域

・男鹿市の小谷地遺跡では第1次調査から9世紀代の舟形（秋田県指定有形文化財「小谷地遺跡出土品 一括」）が出土し、立地は海岸線から2km、現八郎潟の西岸まで4kmの低い土地に広がる水田地帯。昭和30～40年代に板材が多数出土し埋没家屋跡として非常に注目された。また墨書土器や斎串など出土し、律令型の祭祀を行っていたことが指摘されている。埋没家屋跡としていた遺構は、平成21年の調査により水路の流量調節や水温を上げる等の機能を有した灌漑堰跡とされている。

・南秋田郡五城目町の中谷地遺跡（8世紀後半～9世紀）からは槽（田舟・小型の舟「きっつ」）が出土した。前述の小谷地遺跡と八郎潟を挟んで向かい合い、墨書土器等で律令型の祭祀が指摘されている。河川跡から木製品が多数出土。堰跡も確認。中谷地・小谷地遺跡ともに秋田城跡から25km程度。

■　中世

沿岸中央地域

・秋田市の後城遺跡（13～16世紀末）からは舟形が出土した。古代と中世の複合遺跡。古代は史跡秋田城跡に関連し、区画施設で囲まれた竪穴住居跡群など、8世紀前半～9世紀代の集落跡。中世は土坑墓群、掘立柱建物跡等の居住域、竪穴状の貯水施設が地区ごとに検出され、多数の木製品が出土。三津七湊のひとつ秋田湊に近接し、町並を形成した遺跡。室町時代に秋田湊を支配し日本海交易により栄えた湊安東氏と密接な関係を指摘。

・男鹿市の史跡脇本城跡（15～17世紀前）からは舟形が出土した。男鹿半島の南側付け根部分、脇本地区の海に面した標高100m前後の丘陵上に位置する城館跡。城域は150万㎡と広大である。日本

海を拠点に勢力を広げた安東氏の居城であり中心地区の内館からは日本海と海岸線が一望できる。天正5年（1577）に、織田信長とも交流のあった安東愛季が大規模に改修したとの記録が残る。城からは貿易陶磁器（中国元・明、朝鮮）、国産陶器（瀬戸美濃・唐津）、金属製品（火縄銃の弾、武具、馬具など）等、多数出土。木製品は、城跡西側のお念堂地区から出土し、漁具の他、柱状塔婆、笹塔婆等という宗教的なものから生活用具一般まで多様。

八郎潟周辺域

・南秋田郡井川町の洲崎遺跡（13～16世紀）では丸木舟転用の井戸側・櫂が出土した。八郎潟の東岸に位置し、潟にそそぐ井川沿いに位置する。方二町の（約220ｍ）の外周に堀を巡らせた大規模な集落跡。調査面積29,230㎡（詳細調査9,350㎡）であり、井戸跡数は312基とその多さは突出している。幅8ｍの南北道路を基軸とし、堀・溝・道路を整然と配置する。遺跡南西200ｍには船着き場の標柱が残る。陶磁器の他、多量の木製品や井戸材が出土した。

井戸側に転用された丸木舟

丸木舟を転用した井戸跡4基を検出。鋸や手斧で切断した丸木舟を向い合せて井戸側とし、内部に曲物を据えて水溜としている。うち2基の丸木舟は同一個体であり長さ12ｍ程度、使用木材は樹齢300年以上と指摘されている。ちきりや木栓が残る。

井戸側として転用された丸木舟1基には、裏込めとして舟に沿い半分に折られた状態で人魚木簡（秋田県指定有形文化財）が入れられていた。諸説あるが、津軽地方や秋田地方沿岸に出現した人魚とこれに対する人々の対応の様子について描かれた資料として、遺跡から出土した国内唯一のものである。丸木舟の転用とこの木簡は一連の井戸構築儀礼の可能性もある。

	遺構No	構造	法量（cm）	切断	部位	舟形状	廃棄時行為	出土遺物	備考
1	SE04	丸木舟	最大幅124・内底幅71～72・高さ54	斧（底）鋸（側）	胴体	平底	礎多数	珠洲擂鉢（裏込め）・珠洲壺。木製品・土錘・石製品・須恵器甕	裏込めの擂鉢の年代から14世紀代か 船底の木栓と、ちきり確認
2	SE295	丸木舟	最大幅70・内底幅48～58・高さ32	斧	胴体	平底	礎・部材投入 自然木が直立状態で検出	木製品・土錘	
3	SE582	丸木舟	最大幅73・内底幅50・高さ35～38	鋸	胴体	平底		木製品・土錘	
4	SE587	丸木舟	最大幅87～91・内底幅50～62・高さ32～38	斧	先端	やや丸底		木製品（人魚木簡 他）	縦板の年代測定（1287年）片方の舟がSE04の丸木舟と同一のものとの指摘

・八郎潟湖底出土のくり舟（秋田県指定有形文化財）

昭和32年～44年の八郎潟干拓工事中に湖底から丸木舟が発見された。時期不明。オモキを2本使用し、中に補助材をカスガイでつないだ復材のくり舟。八郎潟の舟はちきりを入れるものが一般的。形状から川舟と想定されている。復材の刳り舟である。

3　民俗事例

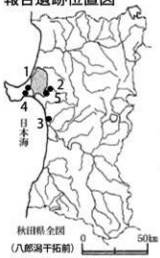
男鹿のまるきぶね（重要有形民俗文化財 指定1艘）

単材刳り抜き舟。信仰の山である「お山」（真山・本山）の木で造ると大漁をもたらすとされた。この山は藩の留山であり、各村では藩より造船のための原木払下げの特権を有していた。

・現存するまるきぶね 1艘 男鹿市戸賀 個人蔵 現役で活躍中（春季になまこづき漁にて使用）

樹齢は300年以上 岩礁地の沿岸漁業に適し、波や潮流に左右されにくい。手入れをすれば三代、100年はもつという。製作には6か月以上が必要。

報告遺跡位置図

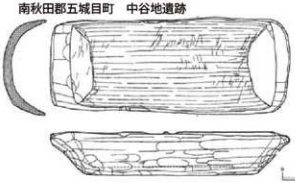


1．小谷地遺跡（男鹿市）
2．中谷地遺跡（五城目町）
3．後城遺跡（秋田市）
4．史跡脇本城跡（男鹿市）
5．洲崎遺跡（井川町）

■古　代

男鹿市　小谷地遺跡

南秋田郡五城目町　中谷地遺跡

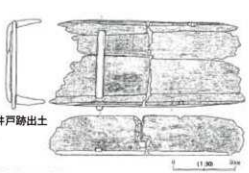


■中　世

秋田市　後城遺跡

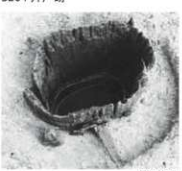
男鹿市　史跡脇本城跡

井川町　洲崎遺跡

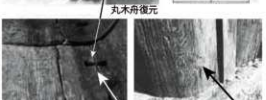


SE295 井戸跡出土
丸木舟

SE04 井戸跡



検出状況



県指定有形文化財
「人魚木簡」
（SE587 丸木舟転用
井戸跡出土）

（SE274 井戸跡出土櫂）

■民俗事例

現在も
使用されている
丸木舟（男鹿市）

北海道における事例

鈴木　信（公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター）

1. はじめに

舟出土遺跡が 13 か所、そのうち 12 か所は続縄文文化期（弥生・古墳時代）以後の例で、なかでも船体（丸木舟の一部・準構造船の一部）・船材・推進具は擦文文化期～アイヌ文化期（古代・中近世）例が多数であり、近世アイヌ文化期の例が極めて多い。紙幅の制限より以下では外洋航海用に係るであろう準構造船について概観する。

2. 出土資料

縄文後期には舟形土製品（函館市戸井貝塚）があり、これは丸木舟の両舷に舷側板を取り付けた準構造船の表現の可能性を示す。続縄文前葉には苫小牧市タプコプ遺跡の舟形土製品、後葉には恵庭市ユカンボシＥ７遺跡の土器絵画がある。前例は両舷に舷側板を取り付けた準構造船の表現であり、後例（図1）は舷側板端が湾曲して高まる表現より、艫舳両端を閉じる構造（所謂、二股船）であることを示す。擦文文化期には札幌市Ｋ 39 遺跡、千歳市美々８遺跡、千歳市ユカンボシＣ 15 遺跡船体より（丸木舟の一部・準構造船の一部）・船材・推進具・舟形木製品・土器絵画が出土する。アイヌ文化期の類例には丸木舟・船材・舟形木製品がある。遺跡名：沼ノ端・ママチ川・根志越３・上野地区・厚岸湖からは丸木舟が、遺跡名：千歳川左岸・Ｋ 483・美々８・ユカンボシＣ 15 では丸木舟の一部が、遺跡名：沼ノ端・オサツ２・オサツ 14・厚岸湖・美々８・ユカンボシＣ 15 からは準構造船の一部（舟敷・舷側板）と車櫂受部が出土している。また、これらのうち遺跡名：沼ノ端・厚岸湖・美々８・ユカンボシＣ 15 では丸木舟と準構造船の両方が出土する。

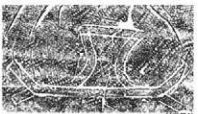


図１　古墳時代後期の土器絵画

図２　小型板綴船

3. アイヌ絵に描かれた板綴船

描かれた板綴船（アイヌ語：イタオマチプ）は以下に区分ができる。「舷側板一段・漕ぎ手が一列並び」を「小型板綴船」（図 2）、「舷側板二段・漕ぎ手が二列並び」を「大型板綴船」（図 3）、中間「舷側板二段・漕ぎ手が一列並び」を「中型板綴船」。

描かれた板綴船で唯一大きさが知られるのは「大舩図」「蝦夷島奇観」であり、「七尋半＝ 37.5 尺≒ 37.5 × 30.3cm ＝ 1136.25cm」と記されている。

図３　大型板綴船

4. 近世・近代文献史料に現れた板綴船

『蝦夷国報告書』、『松前蝦夷記』、『田名部通諸湊役銭取立方につき定目』『青森県史資料編 近世4』によれば、100～300石積の板綴船が17世紀前葉～18世紀末に津軽海峡を航行していた。明治初期には、開拓使顧問H.Capronの日誌には目視によるが板綴船は915～1830㎝、丸木舟610～915㎝である。博物学者T.Blakistonの観察記録には丸木舟約1067.5㎝である。明治初頭には、100石積和船が石狩川河口から空知太（中流域の中間）まで、米20俵（4斗入り俵で2.5俵が1石、20俵→8石積）を積んだ丸木舟が石狩川河口から神居古潭（中流域と上流域の境）まで、遡行しており、石狩川河口から空知太までの間は板綴船と大型丸木舟はともに航行していた。

5. 船体構造と積載量の復元

板綴船とは単材を刳る船底（瓦・舟敷・敷と呼称）に舷側板を縄で綴り付ける構造であるから、板綴船の積載量は舟敷の規格によって規定され、舷側板の高さ分だけ増容積される。舟敷は丸木舟とほぼ同じ形状であるから、板綴船と丸木舟との比較によって積載量を推定し得る。

石狩川中下流域の現存・出土丸木舟と最近隣地域出土板綴船舟敷の測定値（**表1**）より、同一地域内では両者の全長・深さに違いはなく幅と両舷角が相違する。出土舟敷の平均両舷角度33°である。板綴船舟敷は丸木舟に対して最大巾で1.30倍、深さ1.04倍であるから板綴船舟敷容積は丸木舟の1.35倍にあたる。石狩川中下流域では全長7ｍ前後の丸木舟が一般的であったと考えられる。板綴船は舷側板の高さ分だけ増容されるので中央部舷側板幅値が積載量を規定する。板綴船は舷側板の高さ分だけ増容積されるので上下辺が残存する出土舷側板の大きさを表した（**表2**）。1段目中央部舷側板幅平均値28.7㎝、比べて2段目のそれは24.0㎝と狭い。舳艫側舷側板幅は2段目央部舷側板幅平均値に近い。中央部舷側板幅の平均値は27.1㎝である。また、舟敷と舷側板の縫合・舷側板どうしの縫合には綴じ代があることが『入北記』板綴船横断面略図より知られる。1段目の綴孔～板縁辺の長さ平均値が2.9㎝で、2段目の綴孔～板縁辺の長さが1.5㎝であり、この数値を綴じ代と考え舷側板の幅から以下の数値を減じた。1段目の幅：27.1 － 2.9㎝＝ 24.2㎝、2段目の幅：24.0 － 1.5㎝＝ 22.5㎝。

舟敷長7ｍ前後の規格における板綴船の容積を推定する前段に、舟敷平均両舷角33°と舟敷幅と舟敷深さと中央部舷側板幅より、最大幅における舟敷＋舷側板の断面積を推定する（**図4**）。図より舷側板1段目高は23.0㎝、舷側板1段目高は21.0㎝となる。よって、舟敷断面積は1870.5㎠、舷側板1段目断面積は1840.0㎠、舷側板2段目断面積は1963.5㎠となり、これらの比は、舟敷断面積：舷側板1段目断面積：舷側板2段目断面積＝1:0.98:1.05である。

表1　板綴船舟敷と石狩川中下流域の丸木舟の法量

遺跡名など	名称	船種など	全長(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	両舷角(°)	備考
厚ノ澗	2号艇	板綴舟+舟敷	650	74	30	34.0	両舷角+右舷角×2
厚ノ澗	4号艇	板綴舟+舟敷	766	72	27	32.0	両舷角+右舷角×2
			708	73	29	33.0	
厚ノ澗	0号艇	丸木舟	963	94	30		外れ値とする
厚ノ澗	1号艇	丸木舟	765	74	30		
厚ノ澗	3号艇	丸木舟	740	78	35		
上野地区		丸木舟	663	60	25	40.0	
マツチ川		丸木舟	728	58	26	40.5	舟底厚5.4cm
松志舘3		丸木舟	—	—	—	43.5	舟底厚3.0cm
石狩川中下流域	由良№21	丸木舟	725	40	31		現代製作
石狩川中下流域	由良№22	丸木舟	746	44	25		現代製作
石狩川中下流域	由良№23	丸木舟	695	61	23		近代遺物
石狩川中下流域	由良№24	丸木舟	590	56	26		現代製作
			709	56	28	41.3	
板綴船舟敷数値/丸木舟数値：			1.00	1.3	1.04		

表2　出土舷側板の大きさ

遺跡名	層位	種類	全長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	綴孔～板縁までの長さ(cm)	備考
ユカンボシC15	I B3層	艫舳側1段目	156.2	23.2	2.6	3.0	
ユカンボシC15	I B2層	艫舳側1段目	189.6	23.6	2.4	3.5	
				23.4	2.5	3.3	
ユカンボシC15	I B3層	中央1段目	157.5	26.4	2.3	2.3	
美々8	OB層	中央1段目	366.3	31.0	1.9	3.5	
ユカンボシC15	I B2層	中央2段目	142.0	24.0	3.1	1.5	
				27.1	2.4	2.4	

*斜字体は現存長
*厚さは最大幅における値
*綴孔～板縁までの長さ（cm）は最大幅に直近の孔の数値で、上下がある場合はその平均

大型丸木舟の積載量は８石積より、舟敷長７ｍ舟敷容積は８石×1.35＝10.8石積、舷側板１段目容積：10.8石積×0.98＝10.6石積、舷側板２段目容積：10.8石積×1.05＝11.3石積。

以上より、舷側板一段・漕ぎ手が一列並びの小型板綴船は舟敷容積＋舷側板一段目容積：10.8＋10.6＝21.4石積以下、舷側板二段・漕ぎ手が一列並びの中型板綴船は舟敷容積＋舷側板１段目容積＋舷側板２段目容積：10.8＋10.6+11.3＝32.7石積以下と推定される。舷側板二段・漕ぎ手が二列並びの大型板綴船は、漕ぎ手が二列なので中型板綴船の最大幅の二倍近くはあるので32.7×2=65.4石積以上となる。

ただし、外れ値とした沼ノ端０号艇、H.Capronが目視した丸木舟、T.Blakistonが観察した丸木舟のように全長９ｍ以上になる大型丸木舟もあると思われる。同様に、大型丸木舟を舟敷とする大型板綴船も想定でき、『蝦夷島奇観』「大舩図」は全長11ｍ位、H.Capronの目視最大値全長18ｍ前後も存在する可能性が高い。仮に舟敷長７ｍ以上の規格が全長９ｍ・11ｍ・12ｍ・18ｍであれば、舟敷長７ｍの1.29倍・1.57倍・1.71倍・2.57倍になるので、65.4×1.29=84.4石積、65.4×1.57=102.7石積、65.4×1.71=111.8石積、65.4×2.57=168.1石積となる。

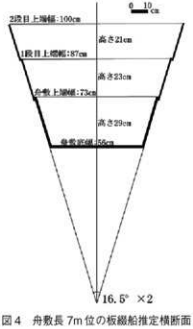


図４　舟敷長７m位の板綴船推定横断面

船体容積の推定にはアイヌ絵を用いることも可能であると考える。（図３）中、立位人物の身長を1.5ｍと仮定し計測基準とすると、全長12ｍ・最大幅1.8ｍとなる。そして、中世本州の準構造船は舟底が複材である以外は板綴船とほぼ同じ構造なので板綴船の積載量が推定できる。石井謙治（1995『和船Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局）によると13世紀代の250石積準構造船（『北野天神縁起絵巻』所載）の復元値が全長32.6ｍ・最大幅2.4ｍである。仮に全長×最大幅で比較すると（図３）板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船の27.6％にあたるので250石積×0.276=69石積と推算できる。いっぽう、二者はほぼ同じ構造なので全長で推算することも可能であり（図３）板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船の36.8％にあたるので250石積×0.368=92石積と推算できる。両数値は中型板綴船の最大幅の二倍以上の容積65.4石積を上回る値なので65.4石積を大型板綴船の積載最低値とした場合は妥当な数値といえる。両者の乖離が大きい理由は、大型板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船に比べて幅が狭いことである。前述した板綴船全長だけ伸ばした推算値12ｍ→111.8石積であるから全長による推算値92石積に近い、同一形態の船における比較を有意とすれば全長による推算値に確からしさがある。ひとまずは、大型板綴船の積載量を65.4～300石積と推定する。

６．海路について

『続日本紀』『日本後紀』『日本三代実録』に拠れば擦文文化人は秋田郡～飽海郡（山形県北部沿岸）に現れていた。それ以前は北海道系土器の分布によって類推するしかない。弥生時代後期後半には聖山ＫⅡ群・後北Ｃ$_1$式が新潟県西部、古墳時代前期後半には所謂北大Ⅰ式が山形県南部から、少数出土する。続縄文文化人は弥生時代後期後半には北陸中部沿岸まで、擦文文化人は古代には東北中部沿岸までを活動海域にしていたと考えられる。研究集会直後に久田正弘氏より、高岡市下老子笹川遺跡で帯縄文のある天王山式が出土したことを教えていただいた。弥生時代後期前半に活動期が遡る可能性もある。

引用参考文献は紙幅の都合上割愛させていただきました。『発表要旨・資料集　平成25年度環日本海文化交流史調査研究集会　舟と水上交通』2013年　公財石川県埋蔵文化財センターを参照してください。

討論と見学会

討論の様子

8人の講師による発表のあと、討論会が行われた。討論会は時間の関係上、以下の2つのテーマに関して見解を述べる形となった。一つは、舟の製作技法（技術）の発展による舟の変化、もう一つは舟による交流・交易に関することである。

前者のテーマについて、縄文時代、弥生時代、中世の3つの時期の見解が示された。縄文時代の丸木舟の製作実験では、石斧を用い原木の伐採から丸木舟を造るのに延べ42日間要した。弥生時代と比べ石器しかない縄文時代は板材の加工は難しく、丸材をほりぬく技術に終始していた。弥生時代以降は、板材から櫂などを加工してつくる技術は認められているが、縄文時代は石斧による加工に限界があった。

弥生時代には準構造船が造られるようになり、準構造船の製作に鉄器の使用が大きく関係していた。準構造船の竪板、舷側板は鉄器できちっとした加工がなされ、長い舷側版でも鉄器が使用されていた。現在最古の準構造船は滋賀県の赤野井浜遺跡から船首が出土し、弥生時代前期から中期前半頃のものとされる。鉄器を前提に考えると、弥生時代後期から準構造船は造られていくと考えられ、前期・中期前半くらいに準構造船が日本で造られていたとは想定しにくい。弥生時代中期段階からゴンドラ型の舟は絵に描かれ、これを準構造船とみる見解があり、そのように考えるならば、中期段階のゴンドラ型の舟は準構造船と思われる。青谷上寺地遺跡から出土した両端が反りあがったつくりの丸木舟、つまり角型反りあがり丸木舟はゴンドラ型の舟であり、ゴンドラ型の舟は丸木舟でも良いのではないかと思われる。似たような丸木舟は吉野ヶ里遺跡でも出土している。ちなみに、青谷上寺地遺跡出土の角型反りあがり丸木舟は弥生時代前期後葉から確認されており、これは必ずしも鉄器がなくてもできる。

14世紀以前は、板自体を削って打って舟を造っていき、このような板材を合わせ水漏れの心配のない舟の材として使うのであれば、その後剱舟と板船の技法を船体に活かした準構造船に分類されるオモキ造りなどが発展していったと考えられる。また、もともとくりぬいた部材を組み合わせて造ることで、さほど水漏れの心配のない舟を造ることができた。14世紀には、縦挽き鋸が出現してきちっとした板をつくる技術がうまれ、このような板をつくることができることにより、板あわせによる舟の大型化、構造船の普及が進んでいったのではないかと考えている。特に、オモキ造りに関し、その構造をもつドブネは板の端点をしっかりと合わせる必要があり、ここからの水漏れを防止することでも鋸の技術革新が必要不可欠であったのではないかと推測する。

後者のテーマについて、舟の技術革新によって経済活動が盛んになっていく一方、交易品によって舟の大型化・規格化がなされ、その技術も伝わっていったと推測され、この観点から弥生時代の舟による交流の実態について見解が示された。

各地でみられる竪板型準構造船はわりと同じようなつくりで、遠距離交易がなされることで舟の技術が伝わり、同じような技術の舟が造られていったと考えられる。交易品の鉄器は1隻にどのくらい積んだのか分からないが、運搬するのにそれなりの大型の舟が必要であり、その舟が交易で行き来する中で、大阪でも、北陸でも似たような舟が広がっていったと推測される。

翌日に資料見学会が行われた。表で示された出土遺物の他に、白江梯川遺跡から出土した舷側版とみられる船材について検討した。資料見学会では多くの意見が出され、意見交換の活発な見学会となった。この見学会ででた意見をいくつか示しておく。

〔舟形木製品〕

・畝田遺跡出土のものは浅いタイプの丸木舟か。

・千代能美遺跡出土のものには竪板を入れる溝があり、準構造船の舟形である。

〔準構造船の竪板〕

・千代能美遺跡出土のものは舷側板を入れる部分が約60㎝で、小型の舟と考えられる。また両側に対となってあけられているホゾ穴には補強する材を入れてあったのではないか。

〔丸木舟〕

・藤江C遺跡出土の丸木舟の上方に穿たれている孔は、縄を通して舟をひくためのものか。

〔舟部材〕

・白江梯川遺跡出土の舷側版とみられる部材は端部が加工され、また刳り貫かれている孔の形、大きさの異なるものが数種類あり、再利用されていると考えられる。舷側板だとすると大きな舟になる。

・猫橋遺跡出土の舳先ないしは艫付近の部材と舟底部か船尾から立ち上がる部分の部材はつながるとみられる。

（北川晴夫）

資料見学会の様子

見学会資料　出土品リスト

2013・10・26

遺　跡	所在地	出土遺物	出土遺構など	時　代	樹　種	備　考
上町カイダ遺跡	七尾市	舟形木製品	SD30	中世	スギ	
		〃	SD31	〃	スギ	
三引遺跡	七尾市	櫂	貝塚を基盤とする層	縄文早期末～前期初頭	カヤ	
小島西遺跡	七尾市	舟形木製品	下層３層	奈良平安時代	モミ属	
		〃	〃	〃	モミ属	
		〃	〃	〃	コナラ属アカガシ亜属	
		櫂	〃	〃	コナラ属アカガシ亜属	
		〃	下層	〃	クリ	杭に転用
		アカ取り	下層３層	〃	スギ	
寺家遺跡	羽咋市	舟形鉄製品	４層	９世紀第２四半期		
畝田遺跡	金沢市	舟形木製品	〃	弥生終末～古墳前期	ヒノキ	
畝田西遺跡群	金沢市	櫂	SD07	古墳中期・後期	シイノキ属	畝田・寺中遺跡他２遺跡
		アカ取り	SD08	〃	スギ	
		堅板	川	古墳前期の可能性	スギ	
藤江Ｃ遺跡	金沢市	丸木舟	SE7B001	古墳後期		井戸側に転用
		〃	〃	〃		〃
千代・能美遺跡	小松市	腰掛	川跡	古墳前期	スギ	
		堅板	〃	〃	スギ	
		櫂	〃	〃	スギ	
		アカ取り	〃	〃	スギ	
		舟形木製品	〃	〃	スギ	
		〃	〃	〃	スギ	
漆町遺跡	小松市	舟形土製品	１号大溝	古墳前期		
		〃	114号土坑	〃		
		〃	333A号土坑	〃		
白江梯川遺跡	小松市	丸木舟	第15号井戸	平安		井戸側に転用
		〃	第20号井戸	中世		〃
		〃	〃	〃		〃
猫橋遺跡	加賀市	軸先ないしは轆付近	SK13	弥生終末	スギ	井戸構造材に転用
		軸先ないしは轆付近	〃	〃	スギ	〃
		刳船船底部か、船底から立ち上がり部分	〃	〃	スギ	〃
		刳船船底部か、船底から立ち上がり部分	〃	〃	スギ	〃
		刳船船底部か、舷側板	〃	〃		〃
		舷側板	〃	〃	スギ	〃

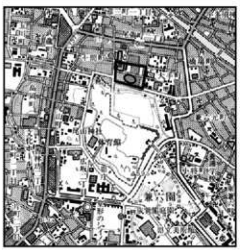
前田氏（長種系）屋敷跡より出土した貝類遺存体の研究

畑山 智史・安中 哲徳

1．はじめに

前田氏（長種系）屋敷跡は、石川県金沢市大手町地内の大手堀北側に所在する。発掘は、国家公務員共済組合連合会金沢共済会館の改築を原因とし、1996（平成８）年７月８日から同年11月８日に実施された。その成果は、石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センターより、2002年に報告されている。

既報（安中・栃木2002）によると、２面の遺構面（1020㎡）が確認され、下面（320㎡）より、縄文時代中期の落し穴１基や弥生時代の墓地、古代の土坑や溝など、それらに帰属する土器や石器などが検出・出土している。今回報告する分析資料は、上面（700㎡）より出土した貝殻や魚骨、獣骨を含む動物遺存体であり、それぞれ近世前葉（町屋期）、前田氏屋敷期、近代以降（大手町小学校他期）の３時期に帰属する。



遺跡の位置（S=1/25,000）
（アミカケ部分は、調査地点）

本屋敷跡は、前田長種（1550（天文19）～1631（寛永８）年）を祖とする加賀藩の老臣前田氏が1639（寛永16）年から1871（明治４）年まで８代にわたり構えた武家屋敷である。前田家（長種系）は、加賀藩の大名家老である加賀八家の一つである。遺跡より出土した資料は武家の生活における食物残滓を含み、これまで文献資料で議論されていた加賀藩の食文化をより具体的に明らかに出来る可能性がある。そこで近世食文化の復元を目的に、貝類遺存体についての分析を実施し、実証的な情報の提示をしたい。

2．資料と方法

資料は、1996年の発掘調査により得られた前田氏（長種系）屋敷跡出土の貝類遺存体である。出土した遺構は、近世前葉（町屋期）～前田氏屋敷跡期に帰属するSK30、SX05、SK27、SK02、SE08である。また近代以降の整地土（０層）からも資料が得られている。遺構の概要と主な遺物は、以下の通りある。

ＳＫ０２　前田氏屋敷（1639-1871）期に帰属する不整形な土坑であり、土師器皿や瓦、輪羽口、鎹、鉄滓などの多数な遺物が出土した廃棄土坑である。1857（安政４）年調整の「前田美作守御上屋敷絵図」では建物の位置に重複することから、絵図に描かれた屋敷の改修前後の遺構（廃棄が近代に下る可能性もある）とみられる。

ＳＫ２７　近世前葉（屋敷地７新）に帰属する略円形の土坑であり、屋敷地中央に位置する。土師器、磁器、碗が出土しており、廃棄土坑と推定される。

ＳＫ３０　近世前葉（屋敷地７新）に帰属する略円形の土坑であり、SK27に切られる。屋敷地中央に位置する。土師器や磁器の他に刀装具や鉱滓などの多数の遺物が出土した廃棄土坑である。

ＳＸ０５　近世前葉（屋敷地７古）に帰属する長さ約5.2ｍ、幅約２ｍの内部に約1.4×1.2ｍ、深さ約２ｍの方形土坑が掘られた地下室と推定され、屋敷地中央（東？）に位置する。土師器皿や陶磁器碗・皿、織部黒香茶碗、焼塩壺、硯、碁石、煙管、小柄、漆器などの多種な遺物が出土している。

ＳＥ０８　近世前葉（屋敷地１新）に帰属する素掘り井戸であり、屋敷地南西隅に位置する。実測可

能な土器・磁器等得られていない。

種の同定には、肉眼およびルーペを用いて、報告者所有の現生貝殻資料や図鑑との比較検討を行った。同定した資料は、種・部位ごとに番号を付記し、収納した。同定出来た資料を計数し、出土遺存体の定量化を図り、客観的なデータの提示に努めた。結果は、動物遺存体属性表（1・2）に記した。

3．結果

54点の貝類遺存体について、10種が同定できた。以下に種名を示す。これらの貝種は食用であり、現在でも県内において採集可能である。次にこれらの生態的特徴や実見によって得られた所見を示す。

① アワビ類（ミミガイ科） *Haliotidae*

破片であるため、種の同定には至らなかった。アワビは他の貝種に比べ、嗜好性が高く、現在も比較的高価であることからも庶民的な食物残滓ではなく、ある程度の身分階層の高さが想像される。

京都の近世遺跡でのアワビ類の出土状況をみると、公家屋敷跡である二條家屋敷跡S 14や武家屋敷跡である平安京左京四条二坊十四町跡SK2053で確認されるものの、町屋跡である平安京左京六条三坊五町跡SX170では出土していない（丸山2013）。東京大学構内遺跡においては、大型のサザエやアカガイとともに出土しており、「ハレの場」での利用が想定されている（追川2004）。アワビ類の存在は、当時の身分階層を示すのかもしれない。

② サザエ *Turbo* (*Batillus*) *cornutus*

各時期より出土しているが、近世前葉からの出土が最も多い。全て殻軸のみであり、蓋が未確認であることから、別途の利用などから廃棄場所が異なる可能性が示唆される。サイズ的には小型であり、目立った受熱痕等はないことから、煮炊きによる利用が考えられる。サザエは、外洋岩礁性の貝種であり、石川県内では現在も一般的である。周年的に採集可能な貝種であるが、旬は夏とされる。

③ バイ *Babylonia japonica*

遺構上面及びSK02東側より1点ずつ出土した。ベーゴマの素材としての利用（池田2011）もあり得るが、完形や前位一部欠損であるため、食物残滓であろう。目立った受熱痕等はないことから、煮炊きによる利用が考えられる。その採集方法は、素手による直接採集、もしくは肉食性の貝種であることから、バイ籠漁が推定される。

④ アカニシ *Rapana venosa*

その採集方法は、素手による直接採集、もしくは肉食性の貝種であることから、バイ籠漁が推定される。現在、七尾湾周辺で「あかにし」と呼称され、市場に流通しているのは「コナガニシ」であり、今回同定した「アカニシ」とは異なる。

⑤ マガキ *Crassostrea gigas*

近代以降の井戸掘方より1点出土した。イワガキが多い本遺跡では、近世以前のマガキは未確認であるため、採食の時期差を反映しているのかもしれない。貝毒があり、採食時季は限定され、主に冬季から春先であろう。

⑥ イワガキ *Crassostrea nippona*

各時期より出土している。目立った受熱痕は、確認できなかったことから、煮炊きや蒸し、生食の可能性が示唆される。マガキとは異なり、旬は夏季であり、当該季節に採食したと思われる。

⑦ フネガイ科 *Arcidae*

破片であり、種の同定には至らなかった。少なくとも肋数が11本以上計数できたことから、アカガイやサルボウガイなどが推定される。

⑧ ヤマトシジミ *Corbicula japonica*

本種の生息域である汽水域環境が工事による悪化や消失のため、石川県レッドリストでは情報不足

のカテゴリに区分されている。県内の分布は、柴山潟、河北潟、邑知潟、奥原潟とされているが、現状は不明とされる。近世の記録によると、蜆貝漁を巡る八田村と五郎島の漁民間での争論（金沢市史編纂委員会2003）があったようで、当時の資源としての重要性の高さが想像される。

⑨ ハマグリ *Meretrix lusoria*

現在、市場に流通している石川県産蛤は、主に外洋性のチョウセンハマグリであり、近世までハマグリが県内に生息していたことは、生物学的にも興味深い事例である。

近世では1836（天保七）年の『外海猟業御役立之分并網・船・魚等品数記帳』によると、ハマグリは「蛤」と記載され、正月～4月頃（旧暦）が漁期とされている。また1858（安政五）年、3月、4月に加賀藩が江戸近海の小蛤を取り寄せ、白尾村から木津外海へ掛けて、放流した記録がある（金沢市史編纂委員会2003）。

No.38は、殻表に強い障害輪が観察できた。障害輪は、その個体が受けた刺激に対する応答であり、例えば津波や洪水などに被災したときに生じる。このハマグリが帰属する時期は、屋敷跡（1639-1871）であり、1799年に生じた金沢地震との関連も興味深い点である。近年では東北沖地震を原因とする津波に被災したアサリの障害輪（災害輪）が報告されている。実際に津波なのか、洪水なのか、その要因を明らかにすることは現時点では難しいが、保存が良好であり、成長線分析を実施することでその障害輪を生じた月日（季節）の推定が可能である。

⑩ チョウセンハマグリ *Meretrix lamarckii*

石川県内では、縄文時代中期の上山田貝塚における主な構成種でもある。現在も「はまぐり」の呼称で、市場に流通している。

⑪ コタマガイ *Gomphina melanegis*

石川県内では、「あさり」や「あおさがい」の呼称で、現在も市場に流通している。この種は、内湾砂泥底に生息するアサリなどに比べると、より外洋に近い砂底に生息する種であり、現在も内灘周辺で採集できる。近世では1836（天保七）年の『外海猟業御役立之分并網・船・魚等品数記帳』によると、コタマガイは「沖あさり」と記載され、「蛤」と同様に正月～4月頃（旧暦）が漁期とされている（金沢市史編纂委員会2003）。

4．考察―近世・近代、金沢における貝類利用の変遷―

a．近世前葉（町屋期）－ SK27、SK30、SX05、SE08 －

二枚貝は、ハマグリ類の破片、巻貝は、サザエ、アカニシが確認できた。小型のサザエが多く、また全て殻軸のみが出土しており、完形がない。小型の個体であることから、刺身などの生食には不適と思われ、煮炊きや焼きによって、調理したのであろう。硬質な蓋は、未確認であることから、廃棄場所が異なるのか、もしくは別途の利用が示唆される。

b．前田氏屋敷期－ SK02（東側）－

二枚貝は、コタマガイ、フネガイ科（アカガイ？）、チョウセンハマグリ、ハマグリ、ヤマトシジミ、不明（イガイ？）、巻貝はアワビ類、サザエ、バイが確認できた。本屋敷跡において最も種が多い時期である。

最も多く出土したコタマガイ9点の内4点については、殻体後位の欠損が特徴的であり、採食時の意図的な破損が窺われる。しかしながら、二枚貝であるため、ある程度の熱量を加えれば貝殻が自ずと開き、容易に可食できる。生食の為に、こじ開けたと考えることも出来るが、コタマガイの生食利用は、現在では一般的ではなく、また加賀藩料理人の舟木伝内の料理書関連（大友ほか編、2006）にも記載がないことから当時も同様とされる。この事例は民族例等を検証し、破損について、今後明ら

かにしたい。

アワビ類は、破片であるため種は未同定である。県内では、他に金沢城跡本丸附段より出土している（黒澤、2008）。東京大学構内遺跡の加賀藩屋敷跡でも、アワビ類やアカガイやサザエ等の大型貝類が出土しており、華やかな「ハレの場」での利用が想定されている（及川 2003）。

この“ハレの場”の時季は、いつであったのか。その問いに答える情報は、貝殻資料に残されている。上記の通り、ハマグリやコタマガイの漁期は、1836（天保七）年の『外海猟業卸役立之分并網・船・魚等品数記帳』によると、旧暦の正月―4月頃（金沢市史編纂委員会 2003）とされ、出土した遺構への廃棄季節も当該期内と考えられる。同文献資料によると、「蝶」の記載があり、4・5月頃（旧暦）が漁期とされている。この「蝶」は、「栄螺」や「赤螺」などが想定される。

他の貝種の漁期が不明であるが、その利用季節は、その旬や季語から知り得ることはできる。それぞれの貝種の季節は、ヤマトシジミ、サザエが夏季（6―8月）である。ハマグリやコタマガイの漁期である旧暦の正月―4月頃は、現在の暦によると2月半ば―6月上旬に相当する。これらの貝類の出土が一括であると仮定すると、これらの重なる時季が“ハレの場”の採食日となり、その日は6月上旬が推察される。一括試料ではなく、時間差をもつ可能性も考えられるが、その場合は、春先と夏季における2度以上の採食および廃棄が想定される。春と夏の時間差が生じている場合、遺構出土の層位と貝種の変化が想定され、廃棄土坑とみられるSK02の形成期間を把握することも可能であろう。

今回は、貝種の旬からその採食時季を試論したが、加賀藩内における他の貝種の確かな漁期も把握できれば、廃棄土坑とみられるSK02の形成時季を更に絞ることも可能であろう。

c．近代以降ー SE04、整地土（0層）ー

二枚貝は、イワガキ、マガキ、ヤマトシジミ、コタマガイ、フネガイ科、巻貝ではサザエ、バイが確認できた。これらの資料は、整地土の資料も含まれるため、近代以前のものも混入している。

井戸SE04北側掘方内から出土したマガキは、カキ類採食の時期差を反映している可能性がある。近世まで、カキ類は圧倒的に外洋性のイワガキが主体であるが、近代に入り内湾性のマガキが確認できたことから、それまでとは異なる産地から流通した結果と想定できる。ただし、マガキは、1点のみの出土であり、今後、周辺の近世遺跡の調査事例も合わせて、検討したい。

5．おわりに

近世では建前上、獣肉食が忌避され、動物質食料の主体は、魚貝類となっており、その内容を明らかにすることは食文化史研究の重要な課題の1つである（丸山 2013）。だが、全国的にも近世遺跡の発掘調査は、他の時代と比べて多いとは言い難く、その中でも動物遺存体が出土し、報告された事例は少数である。

県内においては、金沢市内に所在する金沢城跡の本丸附段、河北門、堂形、木ノ新保遺跡、宝町遺跡（医学部保健学科地区）の発掘調査で報告がなされている。

金沢城跡河北門復元整備に伴って行われた調査より、検出した遺構内から動物遺存体（魚骨）が出土しており、報告されている（パレオ・ラボ 2011）。同じく金沢城の外郭「堂形」の調査においても焼骨片が出土している（高橋ほか 2012）。県内の近世遺跡において、多種・多量な動物遺存体を確認した金沢城跡本丸附段の報告（黒澤 2008）だが、貝類遺存体はわずかであり、その保存状態が同定に適していない。近世前期以降の城下町である木ノ新保遺跡は、足軽や下級武家屋敷地から、十分な貝類遺存体試料が得られており、今回の報告と比較・検討を要す。

今回報告した資料は、質・量ともに十分で、時代時期も明らかであり、保存状態も良好なことから近世における貝類利用を具体的に示すことができる。特に状態が良好であることから、貝殻成長線や

酸素同位体比の分析を行うことも可能であり、例えばその貝を食した月日（季節）の推定や当時の海水温度の復元などといったより解像度の高い情報が得られると期待される。近年、科学分析と文献資料の比較・検討がなされ、雛祭に食されたハマグリとその遺構が推定されている（畑山ほか2009）。

今後も、この基礎的資料を基として自然科学分析も視野に、これまで文献資料のみで取り組まれていた近世加賀の食文化について、遺跡出土の動物遺存体から試みたい。

謝辞

本報告は、畑山が行ったニッセイ財団環境問題研究助成若手・奨励研究「貝殻に記録された災害史の復元手法の開発」の成果の一部に、安中が発掘調査成果（遺構・遺物）の状況等を補足し、編集したものである。また、阿部常樹氏、魚水環氏、岡嶋隆司氏、栃木英道氏、納屋内高史氏、丸山真史氏、山川史子氏に有益な御助言を頂いた。

参考文献

池田　研 2011「大阪城下町とその周辺から出土したバイゴマ（独楽）について」『大阪歴史博物館研究紀要』【大阪歴史博物館】：pp.1-17

追川吉生 2004『江戸のミクロコスモス・加賀藩江戸屋敷』【新泉社】：93p.

岡嶋隆司 2004「真鯛頭部の解体法について―解体手順と料理法の推定―」『動物考古学』21 号【動物考古学研究会】:pp. 91-101

大友信子・川瀬康子・陶　智子・綿抜豊明編 2006『加賀藩料理人舟木伝内編著集』【桂書房】

金沢市史編纂委員会 2003『金沢市史資料編 10　近世八 生産と生活』

金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000「金沢大学宝町遺跡（医学部保健学科地区）」『金沢大学文化財研究』2：pp.45-50

黒澤一男 2008「金沢城跡本丸附段 2004-1（2003-8）地点の動物遺体の同定」『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書』Ⅰ【金沢城調査研究所】：pp.253-264

陶　智子 2005「日本海の水産資源と石川の食文化」『日本海の環境と石川の食文化：講演要旨集』【金沢大学】：pp.10-11

高橋　敦・松元美由紀・金井慎司 2012「樹種同定・微細物分析」『金沢城跡２―堂形（第３・４次調査）―』［石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター］：pp.148-154

畑山智史・富岡直人・遠部　慎・赤松和佳 2009「瀬戸内海地方遺跡群出土ハマグリの採集活動 - 近世を中心として -」『ANTHROPOLOGICAL SCIENCE』Vol. 117, No. 3［The Anthropological Society of Nippon］: p. 185.

パリノ・サーヴェイ 2002「金沢市木ノ新保遺跡の自然科学分析」『木ノ新保遺跡』【石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター】：pp.513-535

バレオ・ラボ 2011「出土した動物遺存体」『金沢城跡―河北門―』［石川県金沢城調査研究所］：pp.172-174

丸山真史 2013「近世、京都の魚食文化の特徴―近世三都の魚貝類の比較を通じて―」『動物考古学』21 号【動物考古学研究会】：pp. 121-135

安中哲徳・栃木英道 2002『金沢市前田氏（長種系）屋敷跡』［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター］：132 p.

参考絵図

1857（安政４）年「前田美作守御上屋敷絵図」（「前田美作守邸図」金沢市立玉川図書館蔵　氏家文庫）

前田氏（長種系）屋敷跡出土の動物遺存体属性表（1）

No.	地区	グリッド	遺構	時代時期	日付	小分類	部位・部分	左右	備考
1	A	A2	SK30	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
2	A	A2	SK30	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
3	A	A2	SK30	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
4	A	A2	SK30	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
5	A	A2	SK30	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
6	A	A2	SK30	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
7	A	A2	SK30	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
8	A	A2	SK30	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
9	A	A2	SX05	近世前葉	960826	アカニシ	殻軸	-	**写真**
10	C		整地土	近代	961018	カキ類	殻頂欠損	R	イワガキ？
11	B	C1	0層下部	近代	960725	ヤマトシジミ	腹縁一部欠損	R	
12	B	C1	0層下部	近代	960725	カキ類	殻体破片	？	
13	B	C1	0層下部	近代	960725	ヤマトシジミ	完形一部欠損	L	11とは別個体 アワジシジミタイプ
14	B	C1	0層下部	近代	960725	イワガキ	完形一部欠損	R	
15	A	A2	SK27	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
16	A	A2	SK27	近世前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
17	B	D2	0層下部	近代	960724	コタマガイ	腹縁破片	L？	
18	B	C1	整地土上部	近代	960931	フネガイ科	腹縁破片	L	貝輪状に破損
19	B	C1	整地土上部	近代	960931	サザエ	殻軸	-	
20	D		0層	近代	961015	ハマグリ類	殻頂破片	R	チョウセンハマグリ？
21	B	C2	SK02	前田屋敷	960903	コタマガイ	腹縁破片	L	
22	B	C2	SK02	前田屋敷	960903	コタマガイ	後側面欠損	L	オキアサリに似る
23	B	C2	0層下部	近代	960723	コタマガイ	後側面欠損	L	SH:47.98 mm 季節分析可
24	B	C2	0層下部	近代	960723	イワガキ	殻頂欠損	L	殻長 15cm 程
25	B	B2	遺構上面	近代	960725	バイ	前位欠損	-	
26	B	C2	井戸掘方内	不明	960725	ヤマトシジミ	殻体破片	R	遺構名、未記載
27	B	C2	SE04 北側掘方内	近代以降	960806	マガキ	殻頂欠損	L	

前田氏（長種系）屋敷跡出土の動物遺存体属性表（2）

No.	地区	グリッド	遺構	時代時期	日付	小分類	部位・部分	左右	備考
28	B	C2	SE04 北側掘方内	近代以降	960806	コタマガイ	殻頂欠損	?	
29	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	コタマガイ	後位欠損	R	
30	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	コタマガイ	後位欠損	R	
31	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	コタマガイ	後位欠損	L	
32	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	不明	殻体破片	?	イガイ?
33	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	フネガイ科	殻体前位破片	L	季節分析可
34	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	ヤマトシジミ	殻頂欠損	R	2cm 程のサイズ
35	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	バイ	完形	-	**写真**
36	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	サザエ	殻軸	-	
37	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	アワビ類	殻体破片	-	**写真**
38	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	ハマグリ	殻頂欠損	L	強い帯密輪あり 季節分析可、写真
39	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	チョウセンハマグリ	完形、腹縁一部欠損	R	
40	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	ハマグリ	腹縁欠損	R	
41	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	ヤマトシジミ	完形	R	**写真**
42	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	コタマガイ	腹縁破片	R	
43	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	コタマガイ	殻頂破片	R	
44	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	コタマガイ	殻頂破片	R	
45	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	コタマガイ	殻頂破片	R	
46	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数（登録外）
47	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数（登録外）
48	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数（登録外）
49	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数（登録外）
50	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数（登録外）
51	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数（登録外）
52	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数（登録外）
53	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数（登録外）
54	A	B1	SE08	近世前葉	960820	ハマグリ類	殻体破片	R	

前田氏（長種系）屋敷跡　出土貝類

1　バイ　　2　サザエ　　3　アカニシ　　4　アワビ類　　5　イワガキ
6　ヤマトシジミ　　7　コタマガイ　　8　ハマグリ　　9フネガイ科

七尾市　古府ヒノバンデニバン遺跡出土墨書資料概報

和田　龍介

今年度発掘調査が実施された七尾市古府ヒノバンデニバン遺跡では、４点の木簡を含む墨書資料が調査区東側の落ち込み遺構等から出土した。本遺跡は古代の能登国能登郡に属し、一帯は能登国府の推定地とされている。周辺では古府・国分遺跡や能登国分寺などが調査されている。本墨書資料は古府ヒノバンデニバン遺跡の理解のみならず、能登国府を考える上で示唆に富む内容を持つものであり、その重要性を鑑み次号に掲載予定の発掘調査略報に先立って報告するものである。遺跡の概要については次号に譲るが、８世紀前半～後半の掘立柱建物跡20棟が板塀を伴って整然と配置される官衙的色彩の濃い遺跡である。

１号木簡

短冊状の板材（スギ柾目材）の表裏面に墨書する。上端は欠損している。表面は丁寧にケズリ調整を施し平滑な面を整形するが、裏面は板を割り出した状態からほとんど調整が加えられていない。裏面が上の状態で出土したためか木痩せが著しく、下端に墨痕が確認できたが判読までいたらなかった。表面の一部には小刀のような刃物で文字を削り取った痕跡があり、４字の左半分が消されている。内容は３字目以降に『千字文』の第１句・２区の２字目までが記されていることから習書木簡と考えられる。木簡下端はキリオリ痕跡が認められることから、続きは裏面か別材に記されたのであろう。奈良時代では『千字文』は『論語』と並ぶ習書の初学的テキストで、平城宮跡を始め各地の官衙関連遺跡で千字文を習書した木簡が出土している。配字はバランスが悪く、特に「宇宙洪」の部分は字が極端に詰まっているため、文意から推定した。

３号木簡

１号木簡同様、短冊状の板材（スギ柾目材）の表裏に墨書する。４点に割れた状態で出土したが、上下左右ともほぼ完存する。表裏面にケズリ調整によって平滑面を整形するが、裏面は依存状況があまりよくない。内容は「余」「今」「人」「入」字を連続して記すもので、これも習書木簡であろう。いずれの字にも共通する「右払い」を練習したものと見え、裏面の「入」では様々な起筆からの払いを練習している。中には波磔（波勢）にも見えるように強調しているものもあり、北魏風の力強い書体である。

墨書土器「市殿」

須恵器無台坏の外底部に大振りな文字で「市殿」と墨書される。木簡の楷書に比べやや筆を崩した行書風の書体で、「漢字を知っている」人物による墨書であろう。墨書される無台坏は高松・押水窯跡群の田嶋編年古代Ⅲ期（８世紀第２四半期）のもので、遺跡の年代幅の中では初期に属するものである。

木簡は２点ともに習書で直接遺跡の性格を語るものではないが、「千字文」をテキストとして使用していることや、習書される板材が端材ではなく短冊状を呈することから、古府ヒノバンデニバン遺跡が少なくとも郡レベル以上の官衙関連遺跡であることを示唆している。また「市殿」墨書土器は、「殿」字が敬称でなく建物（施設）を指すとするならば市に関連する遺跡が本遺跡ないし近辺に存在する傍証となり、能登国府に付随する「国府市」の可能性を視野に入れる必要があるだろう。

1号木簡　208×24×3　011型式
・〔少カ〕
・×□夕　天地玄黄　〔宇宙洪カ〕□□□
・□

3号木簡　243×39×5　011型式
・「余余今今人人人人人人人」
・「入入入入入入入入入入」

墨書土器「市殿」

古府ヒノバンデニバン遺跡概略図（S=1/1,000）

石川県埋蔵文化財情報
第31号

発行日　2014（平成26）年4月25日

発行　公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731

URL　http://www.ishikawa-maibun.or.jp/
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　鵜川印刷株式会社

©（公財）石川県埋蔵文化財センター